

一般国道9号（名和淀江道路）の改築に伴う  
埋蔵文化財発掘調査報告書V

鳥取県西伯郡名和町

# 名和乙ヶ谷遺跡

2003

財団法人 鳥取県教育文化財団  
国土交通省 倉吉工事事務所

鳥取県教育文化財団調査報告書83

一般国道9号（名和淀江道路）の改築に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書V  
『名和乙ヶ谷遺跡』

正 誤 表

お手数ですが、以下のように訂正の上、ご活用ください。

頁 行	誤	正
p 27	須恵器遺物番号「1」	1 3
p 29 29行目	さらに	さらに
報告書抄録 発行年月日	(平成14年)	(平成15年)
近世特記事項		平安時代初頭の特記事項へ

一般国道9号（名和淀江道路）の改築に伴う  
埋蔵文化財発掘調査報告書V

鳥取県西伯郡名和町

# 名和乙ヶ谷遺跡

2003

財団法人 鳥取県教育文化財団  
国土交通省 倉吉工事事務所

# 序

名和町は、北に日本海を望み南にそびえる秀峰大山の裾野に広がる、風光明媚な自然に恵まれた町です。また、「太平記」の舞台としても知られ、古い歴史と文化が息づく町でもあります。

さて、県内においては、現在山陰自動車道の整備が着々と進められているところですが、当財団では、国土交通省の委託を受け、この事業に関係した一般国道9号（名和淀江道路）の改築に先立つ埋蔵文化財発掘調査を行っております。

そのうち、名和乙ヶ谷遺跡では平安時代の道や鉄生産に関連した遺構、遺物を確認しました。いずれも、この地域の古代を考える上で重要な情報を得ることかできたと考えています。

今回、その調査成果を報告書としてまとめることができましたが、本書が今後の調査研究や歴史教育のために広く活用され、埋蔵文化財に対する理解や認識がより深まるこことを期待します。

本書をまとめるにあたり、国土交通省倉吉工事事務所、名和町教育委員会ならびに調査に参加いただきました地元の方々には、一方ならぬ御指導、御協力をいただきました。心から感謝し、厚く御礼申し上げます。

平成15年3月

財団法人 鳥取県教育文化財団  
理事長 有田 博充

## 序 文

一般国道9号は、京都市を起点として京都府福知山市を経由し、兵庫県から鳥取県に入り、日本海に沿って西走し、島根県益田市から中国山地を越えて山口市、下関市に至る総延長約691kmの幹線道路であり、西日本の日本海沿岸地域の産業・経済活動の大動脈として大きな役割を果たしています。

このうち国土交通省倉吉工事事務所は、東伯郡泊村から米子市（鳥取・島根県境）までの76.6kmを管轄しており、時代の要請に沿った各種の道路整備事業を実施しているところです。

こうしたなか名和淀江道路は、西伯郡名和町から淀江町にかけての国道9号の渋滞等混雑の緩和、冬季などの交通障害等の解消、県内の安全かつ円滑な東西交通ルートの確保、また災害時の緊急輸送の代替道路確保を目的として計画された高規格幹線道路（自動車専用道路）であり、平成8年度から事業に着手しています。

このルートには、多数の「埋蔵文化財包蔵地」がありますが、鳥取県教育委員会と協議を行い、文化財保護法第57条の3の規定に基づき文化庁に通知した結果、事前に発掘調査を実施し、記録保存を行うこととなりました。

このうち平成14年度は「名和乙ヶ谷遺跡」について財団法人鳥取県教育文化財団と発掘調査委託契約を締結し、発掘調査が行われました。

本書はこの調査結果をまとめたものです。この貴重な「記録」が文化財に対する認識と理解を深め、広く活用されることを願うとともに、国土交通省の道路事業が文化財保護に深い関心を持ち、記録保存に努力していることを御理解いただければ幸いに存じます。

おわりに、事前の協議をはじめ、現地での調査から報告書の編集に至るまでご尽力いただいた鳥取県教育委員会及び財団法人鳥取県教育文化財団の関係各位に対し、心から感謝申し上げます。

平成15年3月

国土交通省 倉吉工事事務所長  
矢 田 光 夫

## 例　　言

1. 本報告書は、「一般国道9号（名和淀江道路）改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査」として実施した埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 本報告書に収載した遺跡の所在地は、以下のとおりである。  
名和町大字名和字乙ヶ谷1165-1ほか、字東穴田1176-1
3. 本報告書における方位、座標値は、国土座標第V系の座標値である。また、レベルは海拔標高を表す。
4. 本報告書に掲載した地図は、国土地理院発行の1/25,000地形図「淀江」「御来屋」「船上山」を使用した。
5. 本発掘調査にあたり現地指導および出土した鉄関連遺物の分類をたら研究会委員穴澤義功氏に、土器の胎土分析を岡山理科大学白石純氏に、石材鑑定を遠藤勝壽氏にそれぞれお願いした。また白石氏には玉稿を賜った。記して深謝いたします。
6. 本報告にあたり、遺跡の航空写真撮影を専門業者に、現地における基準点測量および地形測量を測量コンサルタントに委託した。
7. 遺物の実測・浄書は調査員および室内整理作業員が行った。
8. 掲載図面は、調査員が作成したものを調査員および室内整理作業員が浄書を行った。
9. 現場および遺物の写真撮影は調査員が行った。
10. 発掘調査によって作成された図面、写真などの記録類、および出土遺物などは鳥取県埋蔵文化財センターに保管されている。
11. 本報告書の作成は調査員の協議に基づき執筆し、中森が纏集した。文責は目次および文末に記した。
12. 現地調査および報告書の作成にあたっては上記の方々のほかに、多くの方々からご指導、ご助言およびご支援いただいた。明記して深謝いたします。（敬称略、順不同）  
角田徳幸、西尾克己、東森晋（以上島根県埋蔵文化財調査センター）、佐伯純也、高橋浩樹、平木裕子（以上米子市教育文化事業団）、辻信広（名和町教育委員会）、中村唯史（三瓶自然館）、西尾秀道（中山町教育委員会）、東森市良（前島根考古学研究会会长）、南博史（京都文化博物館）、目次謙一（島根県古代文化センター）、山上雅弘（兵庫県教育委員会）、山村信榮（太宰府市教育委員会）

## 凡　　例

1. 発掘調査時における遺構名、番号は報告書作成時に大幅に変更している。新旧の対照は第3章に示した。なお、遺構の呼称は、例えば土坑状遺構については土坑とし、他の遺構についても「状遺構」を省略した。

2. 遺跡の略称はNOTとした。

3. 本報告書における遺物番号は次のように記す。

番号のみ：土器、土製品、被熱粘土塊 S：石器 F：鉄製品、鉄滓 C：銭貨

また基本的に須恵器・土師器・陶磁器は1/4、縄文土器・土製品・石器・鉄製品・鉄滓は1/3の大きさで掲載した。

4. 掘図、遺構・遺物にはそれぞれ通し番号をつけた。

5. 本文中、挿図中および写真図版の遺物番号は一致する。

6. 遺物実測図のうち須恵器は断面を黒塗りにし、それ以外は白抜きであらわした。

7. 遺物には遺跡名略称、グリッド名、遺構名、取上げ番号、取上げ年月日を基本的に注記した。

8. 遺構・遺物に用いたスクリーンコードはそれぞれ以下のものを表す。

地山 硬化面 磨面

9. 製鉄関連遺物に関しては、強力磁石 (T U J I M A P U P - M) と特殊金属探知機による鉄塊の抽出と、内眼観察による考古学的な遺物の分類を行った。資料の分類、抽出、ならびに資料観察表の作成には穴澤義功氏に依頼し、ご指導賜った。

10. 遺物観察表は時期ごとに各章に掲載し、鉄関連遺物は第5章に載せた。表については以下のとおりとする。

(1) 土器についての法量は基本的に口径、器高を記載した。すべての遺物に対して、復元したものは\*印、残存値は△印を数値の前に付している。単位はcmである。

(2) 製鉄関連遺物についての法量は最大長、最大幅、最大厚、重量を計測した。

磁着度は鉄滓分類用の「標準磁石」を用いて資料との反応を1~8までの数字で表現したもので、数値が大きいほど磁着度が強い。メタル度は小型金属探知機によって判定された金属鉄の残留度を示すもので、基準感度は次のとおりである。

H (○) : Hは最高感度でごく小さな金属鉄が残留することを示す。

M (◎) : Mは標準感度で一般的な大きさや金属鉄が残留することを示す。

L (●) : Lは低感度でやや大きな金属鉄が残留することを示す。

特L (☆) : 特Lは低感度でL以上の大好きな金属鉄が残留することを示す。

# 目 次

序

序文

例言

目次

第1章 調査の経緯 .....	(中森) 1
第1節 調査に至る経緯 .....	1
第2節 調査の経過 .....	2
第3節 調査体制 .....	3
第2章 位置と環境 .....	(浅田) 4
第3章 遺跡の概要 .....	(中森) 7
第1節 調査の方法 .....	7
第2節 概要 .....	7
第3節 調査地内の堆積 .....	15
第4章 縄文時代の調査 .....	(中森・浅田) 16
第1節 概要 .....	(中森) 16
第2節 検出した遺構と遺物 .....	(中森・浅田) 19
第5章 平安時代の調査 .....	(中森) 24
第1節 概要 .....	24
第2節 検出した遺構と遺物 .....	28
第6章 近世以降の調査 .....	(中森) 39
第1節 概要 .....	39
第2節 検出した遺構と遺物 .....	39
第7章	
特論1 名和乙ヶ谷遺跡出土土器の胎土分析 .....	白石 純 49
特論2 名和町における鉄生産 .....	(中森) 52
特論3 島根県における道路状遺構について .....	(中森) 57
第8章 まとめ .....	(中森・浅田) 60

## 挿図目次

図1 調査地位置	1	図23 遺構外出土遺物(1)	32
図2 周辺遺跡分布	5	図24 遺構外出土遺物(2)	33
図3 グリッドおよびトレンチ配置	7	図25 近世遺構分布	39
図4 調査前地形測量	8	図26 窟地、テラス1~4	40
図5 調査後地形測量	9	図27 窟地内土層断面	41
図6 調査地内遺構分布	10	図28 溝4、土壙1、テラス5 および窓地内出土遺物	42
図7 調査地内土層断面(1)	11~12	図29 集石	43
図8 調査地内土層断面(2)	13~14	図30 道7、土壙2~4、テラス6および出土遺物	44
図9 繩文時代遺構分布	16		
図10 土坑1・2および出土遺物	17	図31 道7	45
図11 土坑3~9	18	図32 土坑12および出土遺物	46
図12 ピット群	19	図33 遺構外出土遺物	47
図13 土坑10・11および出土遺物	20	図34 名和乙ヶ谷遺跡内出土土器の比較 (K-Ca散布図)	51
図14 遺構外出土遺物(1)	22	図35 名和乙ヶ谷遺跡内出土土器の比較 (Sr-Rb散布図)	51
図15 遺構外出土遺物(2)	23	図36 製鉄関連遺物分布	52
図16 平安時代遺構分布	24	図37 製鉄関連遺物構成図	53
図17 調査地南側遺構分布	25	図38 名和町内製鉄関連遺跡分布および遺構	54
図18 道1・2、溝1	26	図39 鳥取県内の道路状遺構	58
図19 道3・4および出土遺物	27		
図20 ピット群	28		
図21 道5・6、溝2・3	30		
図22 道5・6出土遺物	31		

## 写真目次

fig.1 土坑1・2(東から)	17	fig.4 土壙1検出状況(北西から)	42
fig.2 溝1完掘状況(東から)	26	fig.5 波板状凹凸面断面(南東から)	44
fig.3 濡苔痕(26)	32		

## 挿表目次

表1 繩文時代土器・土製品観察表	22	表10 製鉄関連遺物分析用観察表(5)	36
表2 繩文時代石製品観察表	23	表11 製鉄関連遺物分析用観察表(6)	37
表3 遺構内出土土器観察表	31	表12 製鉄関連遺物分析用観察表(7)	37
表4 遺構内出土製鉄関連遺物観察表	31	表13 遺構外出土製鉄関連遺物観察表	38
表5 遺構外出土土器観察表	34	表14 第6章土器・陶磁器観察表	48
表6 製鉄関連遺物分析用観察表(1)	34	表15 第6章土・石・銅製品観察表	48
表7 製鉄関連遺物分析用観察表(2)	35	表16 名和乙ヶ谷遺跡出土土器の胎土分析一覧表	50
表8 製鉄関連遺物分析用観察表(3)	35	表17 鳥取県内の道路状遺構一覧	59
表9 製鉄関連遺物分析用観察表(4)	36		

## 図版目次

### <カラー図版>

- 1-1 調査地遠景（調査後、南西から）
- 2 調査地遠景（調査後、東から）
- 2 道5～7完掘状況（東から）

### <図版>

- 1-1 調査地遠景（調査前、南から）
- 2 調査地遠景（調査前、東から）
- 2-1 土坑5完掘（南東から）
- 2 土坑8完掘（南東から）
- 3 土坑6完掘（南西から）
- 4 土坑7完掘（西北から）
- 5 土坑群完掘状況（西から）
- 3-1 土坑1完掘（南から）
- 2 土坑2完掘（西北から）
- 3 土坑10完掘（東から）
- 4 土坑11、P1完掘（東から）
- 5 土坑11完掘（西から）
- 4-1 繩文時代後～晩期土器
- 2 黒曜石
- 3 繩文時代石製品
- 5 道1～3完掘（北東から）
- 6-1 道1・2完掘（西から）
- 2 道1・2断面（東から）
- 3 道3断面（南東から）
- 4 道5・6出土遺物
- 5 遺構外出土遺物
- 6 道3波板状凹凸面半截状況（北東から）

### 7-1 鉄製品X線写真

- 2 調査地内出土鉄製品
- 3 調査地内出土製鉄関連遺物
- 8-1 窪地完掘（南から）

### 7-2 窪地内土層断面（C-C'西側、北西から）

- 3 窪地内土層断面（C-C'東側、南から）

### 7-3 窪地完掘（西から）

- 9-1 窪地内出土遺物
- 2 調査地内出土銭貨
- 3 テラス4（南から）
- 4 テラス1・2（南西から）
- 5 窪地内トレーナー設置状況（南から）

### 10-1 道7検出状況（東から）

- 2 道7、テラス6（南東から）
- 3 道7波板状凹凸面完掘（北西から）
- 4 土壘3断面（南西から）
- 5 道7断面（西から）
- 6 道7完掘（東から）

### 11-1 土壘1検出状況（北から）

- 2 溝4、土壘1断面（南から）
- 3 土壘2検出状況（西から）
- 4 溝4完掘（南西から）
- 5 土坑12完掘（東から）
- 6 土坑12出土遺物

### 12-1 遺構外出土肥前系磁器

- 2 遺構外出土土玉
- 3 集石検出状況（南から）
- 4 調査地遠景（調査後）

# 第1章 調査の経緯

## 第1節 調査に至る経緯

国道9号は京都市から兵庫県、鳥取県、島根県を通り山口県下関市まで続く総延長約671kmの幹線道路である。このうち国土交通省倉吉工事事務所では東伯郡泊村から米子市までの70.6kmを管轄し、米子一淀江間・羽合一青谷間はすでに高規格幹線道路（自動車専用道路）が開通・運用されている。またその一環として、名和淀江道路が計画されており、これは名和町から淀江町にかけての国道9号の渋滞混雑の緩和や災害時の緊急輸送の代替道路確保などを目的としている。

道路の建設予定地となる名和町は県内でも有数の「埋蔵文化財包蔵地」であり、名和町内ではすでに、茶畠六反田遺跡・押平弘法堂遺跡の調査が行われ、報告書が刊行されている（註1）。今回の調査地である名和乙ヶ谷遺跡では、平成13年度に名和町教育委員会により試掘調査が行われ、遺構・遺物が検出された。その結果を受け、国土交通省倉吉工事事務所は、鳥取県教育委員会文化課と協議を行い、文化財保護法第57条の3の規定に基づき鳥取県教育委員会教育長に通知した。その上で記録保存のための事前発掘調査の指示を受けた国土交通省倉吉工事事務所は、発掘調査を財団法人鳥取県教育文化財團に委託した。これにより、西部埋蔵文化財名和調査事務所が調査を担当することになり、財団法人鳥取県教育文化財團鳥取県埋蔵文化財センター所長から鳥取県教育委員会教育長に文化財保護法第57条第1項に基づく発掘調査の届出を提出した。

（中森）

（註1）八峰 興ほか編 2002『茶畠六反田遺跡・押平弘法堂遺跡・富岡播磨洞遺跡・安原溝尻遺跡』  
（財）鳥取県教育文化財團

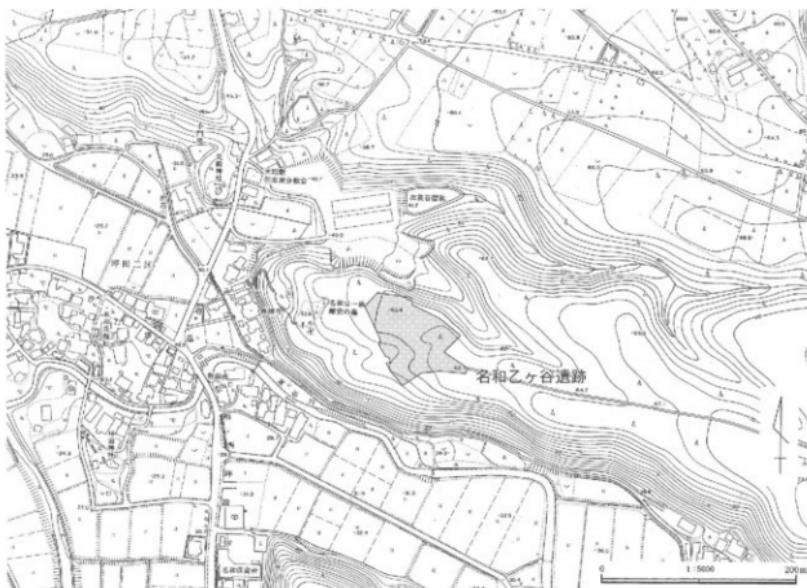


図1 調査位置

## 第2節 調査の経過

調査は4月15日より着手。排土置場予定地の立木が未伐採であったため、まず人力によるトレンチ調査から開始した。4月25日から調査地西側の表土剥ぎを重機で行うが、排土は調査地内南東部に仮置きし、立木伐採後の5月28日から再度重機により排土をふった。

表土剥ぎ後調査地西側から精査し、近世後期の遺構面であるⅠ層（平安時代遺物包含層）上面を検出していった。その後東側からⅠ層を掘り下げ、平安時代の道を検出、調査していった。これらの遺構群は調査地の東から南にかけて密に分布していることがわかり、さらに道路状遺構は平安時代のものを近世のものが切っていることも判明した。またこの範囲に鉄滓が多くみられたことから、この周辺に平安時代の鍛冶施設があることが推測できた。

調査地北西隅に入れられた名和町教育委員会による試掘調査で、すでに縄文時代の土坑2基が検出されており、この周辺に当該期の遺構および遺物包含層の存在は想定できていた。そして本調査段階で入れたトレンチにより、Ⅰ層下に包含層（Ⅱ層）の拝がりを確認し、掘り下げた結果土坑群を検出した。

掘り下げ作業は10月後半に終了。調査後の空撮・測量後、11月10日に現地説明会を開催し、すべての現地における作業を終えた。

### <調査日誌抄>

4/15	調査開始。
4/19・20	ラジコン飛行機による調査前空撮。
4/23	調査前地形測量開始。
4/25	重機による表土剥ぎ開始。
5/7	山上雅弘氏来跡。
5/9	調査基準杭設置。
6/13	Ⅰ層掘り下げ開始。
7/11	調査地南側掘り下げ開始。
7/30	道5・6検出。
8/19	道5・6波板状凹凸面検出。
8/21	佐伯純也、高橋浩樹、平木裕子氏来跡。
8/28	道1・2硬化面検出。
9/2	Ⅱ層掘り下げ開始。
9/11	道3波板状凹凸面検出。
10/8～11	穴澤義功氏製鉄関連遺物分類・分析、および現地指導。
10/15	中村唯史氏来跡。
10/30	調査後空撮。
11/10	現地説明会。現場における作業終了。

### 第3節 調査体制

○調査主体 財團法人 烏取県教育文化財団

理 事 長 有田 博充

常 務 理 事 川口 一彦 (鳥取県教育委員会事務局次長)

事 務 局 長 下田 弘人

埋蔵文化財センター

所 長 田中 弘道 (本務 県埋蔵文化財センター所長)

次 長 竹内 茂 (兼) 庶務課 課長

加藤 隆昭 (兼) 調査研究課 課長

企画調整班 班長 松田 潔 (8月異動)

文化財主事 原田 雅弘

庶務課 主任事務職員 矢部 美恵

事務職員 中島いづみ

○調査担当 第2調査班 西部埋蔵文化財名和調査事務所

所 長 西村 成徳

班 長 八峰 興

主任調査員 中森 祥

調査員 渡田 康行

調査補助員 山本 宗昭

事務補助員 金田かおる

○調査指導 鳥取県教育委員会事務局文化課、鳥取県埋蔵文化財センター

○調査協力 名和町教育委員会

下記の方々に発掘調査・整理作業に従事していただいた。

橋井 光夫	橋井 久子	高見 勝子	円岡孝太郎	村山登喜子	村山江美子	本田 哲雄
金田 祥子	林原 謙次	石田 裕子	出口 守二	出口 玲子	大島とよ子	石谷千枝子
松井 弘子	宮川 房江	宮川 誠司	原田 鈴子	足口 寿一	田中美登里	宮川 早苗
荒松喜代美	大林 光雄	竹村 司亨	山根恵美子	岩倉 省二	村山 恒治	竹村 貞
古本 孝文	薩摩智恵子	権田ふじえ	山本百合子	山本 広治	前田 栄子	西山 鮑子
山田喜美江	権田 浅子	角田 光範	石上イチ子	青木 行正	岩垣 命	

## 第2章 位置と環境

### 第1節 地理的環境

名和町は県の西部、米子市の東方約20kmに位置し、東は中山町、南西は大山町に接している。北は日本海に臨み、はるか隱岐島を望む大山の裾野地帯にある。大山を水源とする真子川・名和川・阿弥陀川が北流して日本海に注いでいる。地形は弥山などから噴出した名和火碎流や弥山火碎流などを基盤とし、大山山腹を頂点とした扇状に広がっている。北部は阿弥陀川から形成された県下最大級の阿弥陀川扇状地からなり、主に水田地帯として利用されている。南部は山地・台地・段丘が同心円上に並んでおり、これらの地形を刻むように、北西に向かつて無数の谷が走っている。谷によって区切られた台地は広く緩やかな傾斜が続き、開拓村がいくつか所在し、主に畑作地帯として利用されている。

(淺田)

### 第2節 歴史的環境

#### 1 旧石器時代～縄文時代

旧石器時代～縄文時代草創期の遺物や遺構は、現在のところ名和町内では確認されていないが、近隣の淀江町から関金町、倉吉市など大山山麓で発見されている。

＜縄文時代早期＞ 早期の押型文土器が上大山第1遺跡、角塚遺跡、高田原第一遺跡のほか、今年度調査が行われた古御堂金蔵ヶ平遺跡などで確認されている。また茶畠山道遺跡からは、縦維土器が出土している。

＜縄文時代前期～後期、晚期＞ 前期については大山町の中高遺跡、中期については今年度調査が行われた名和衣装谷遺跡のほか、中山町の細工塚遺跡で土坑や遺物が確認されている。後期では名和町の古御堂遺跡や南川遺跡がある。南川遺跡からは、西日本でも珍しい五角形の石組炉をもつ住居跡と磨消縄文の深鉢が出土している。また晚期については大塚遺跡、高田第10遺跡、文珠領屋敷遺跡などがある。

#### 2 弥生時代

＜弥生時代前期＞ 前期の遺跡は名和町の大塚岩田遺跡があり、ここから環濠の可能性のある溝状遺構が検出されている。また、大塚塚根試掘調査や茶畠山道遺跡で前期の土器片が確認されている。

＜弥生時代中期＞ この時期の集落はやや丘陵側でみられるようになる。名和町では、茶畠山道遺跡とその南隣に位置する茶畠六反田遺跡がある。茶畠山道遺跡は中期中葉～後葉段階が主で、掘立柱建物を中心とし、この地域の拠点集落とみられている。またその西側の阿弥陀川右岸の押平弘法堂遺跡では中期の土壙墓9基が調査されている。茶畠第一遺跡においては、布振りの建物跡が確認されている。

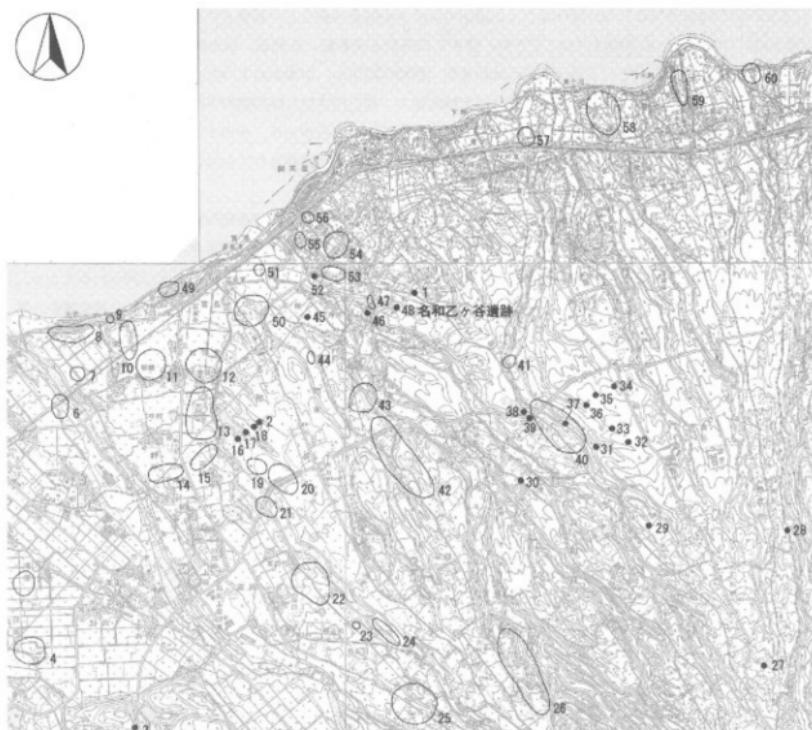
＜弥生時代後期＞ この時期の集落はさらに丘陵の上側に位置するようになる。名和町の茶畠第1遺跡、東高田遺跡、茶畠第2遺跡、大山町の塚田遺跡がある。茶畠第1遺跡では大型の堅穴住居や棟持柱をもつ大型の掘立柱建物など形態的特徴をもつ大型の建物跡が多数確認されている。また大山町から淀江町にかけて山陰地方最大規模の妻木晚田遺跡があり、400棟にのぼる堅穴住居のほか、四隅突出型墳丘墓や環濠などが検出されている。

#### 3 古墳時代

中期後半には名和町のハンボ塚古墳がある。径33mの円墳で、円筒埴輪や人物型や水鳥型の形象埴輪が出土している。後期の古墳群としては、名和町では茶畠古墳群、高田古墳群、門前古墳群、富長山村古墳群、坪田古墳群、豊成古墳群などがある。

#### 4 奈良～平安時代

この時代には寺院の建立が各地で行われている。名和町内において、高田原遺跡がある。ここからは乱石積基壇や溝状遺構が検出されており、上淀庵寺と同じ形式の単弁十二葉蓮華文の軒丸瓦が出土している。淀江町の上淀庵寺跡では彩色壁画片が出土した。伽藍配置は3つの塔心礎が南北に並ぶ類を見ないものである。



遺跡名	縄文時代					弥生時代					古墳時代					歴史時代					遺跡名	縄文時代					弥生時代					古墳時代					歴史時代				
	前期	中期	後期	前半	中期	後期	前半	中期	後期	前半	中期	後期	前半	中期	後期	前半	中期	後期	前半	中期	後期	前半	中期	後期	前半	中期	後期	前半	中期	後期											
1 名和乙ヶ谷遺跡	○									○						○	31 上寺谷たたら																?								
2 古御堂金藏ヶ平遺跡	△				△		△	△								32 田ノ免たたら																?									
3 御殿方墳						■										33 田ノ免たたら																?									
4 境川遺跡	△						○	○	○	○						34 猪崎																?									
5 佐原遺跡							○	○	○	○						35 門ケノ河原																?									
6 二子上野原2遺跡				○	○	○	○	○	○						36 小下ノ河原土塁																?										
7 大屋敷遺跡										○						37 上寺谷入たら																?									
8 大屋敷	△															38 沼田																?									
9 大屋敷1遺跡		○														39 桜原羽毛畠窯業																?									
10 大屋敷2遺跡			○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	40 沼田遺跡																○									
11 古御堂遺跡				○	○	○	○	○	○						○	41 佐留遺跡															○										
12 文殊御堂遺跡				○	△											42 門前第3遺跡															?	○									
13 佐浦山遺跡						○										43 門前古墳群																									
14 球川弘法堂遺跡							○	○	○							44 門前遺跡(牧布地)																									
15 斎田第六反田遺跡				△	○	△										45 門前礫石群																									
16 斎田第五反田遺跡					○											46 名和公鶴跡伝承地																									
17 球川無田遺跡							?									47 球川遺跡																									
18 古御堂瓦釜山遺跡								○	○	○						48 名和乙ヶ谷遺跡																									
19 斎田六反田											●					49 言具城跡																									
20 斎田第五反田遺跡											○					50 言具山村古墳群																									
21 斎田第四反田遺跡											○					51 雨川遺跡																									
22 球川古墳群											●					52 ハンボ塚古墳																									
23 球川原遺跡											○					53 井手古墳群																									
24 斎田第四反田遺跡											○					54 佐曾原遺跡																									
25 斎田第十遺跡								△	○	○						55 佐野遺跡																									
26 上大山第1遺跡	△															56 木連谷遺跡(豊西地)																									
27 斎田合遺跡	△															57 伊勢谷分界遺跡																									
28 墓原												?				58 伊勢谷遺跡																									
29 滝り原											?					59 伊勢谷遺跡																									
30 小倉谷(昭和設)										?						60 丹野遺跡																									

図2 周辺遺跡分布

また一方では各地で律令制が施行され、伯耆国の国亭や山陰道の駅などが整備された。平安時代に編纂された『延喜式』によると、伯耆国は六郡に分かれ、郡内には東から笏賀駅、松原駅、清水駅、和名駅、相生駅の5駅が置かれていたとある。そのうち汎入郡には和名駅（奈和の誤記か）が置かれていたとされるが、その正確な位置は明らかではない。名和町の長者原遺跡は都衙推定地で、礎石抜き取り跡が調査され、付近から「財」の銅印が採集されている。この辺りには「馬郡」「東馬郡」「西馬郡」の地名があり、その小字名から名和駅の存在が推測される。上寺谷遺跡では製鉄炉が確認されている。周辺では鉄滓が表採されており、鉄生産の拠点的な存在であることが推測される。

平安時代前期の様相は不明瞭であるが、中期には名和町の茶畑六反田遺跡で縁糞陶器や墨書き土器を含む条里区画とみられる溝状遺構が検出されている。主軸はほぼ北を指す。この時期は各地で条里制が整備されており、淀江平野に躍進される条里区画は著名である。名和町では地名に「中坪」「岩坪」「大坪」などがみられることや、地籍図や航空写真を見ると方格地割が検出できることから、条里制の施行が推測される。名和乙ヶ谷遺跡からは道路跡が見つかり、鉄滓が出土していることから鉄生産に関係する道路であると推測している。谷を隔てた名和衣装谷遺跡では工房もしくは雑舎とみられる2間×5間の大型建物跡が2棟調査され、縁・灰釉陶器などが出土している。

## 7 鎌倉～室町時代

名和町では扇状地に集落が見られるようになる。茶畑・押平地域では茶畑六反田遺跡や文殊領屋敷遺跡、西側の押平弘法堂遺跡がある。ここでは建物のほか屋敷墓が調査されている。ただしこれらの集落は、いずれも鎌倉時代の後半には姿を消している。集落の廃絶後の時期である茶畑六反田遺跡や文殊領屋敷遺跡からは耕作痕跡が確認されている。集落から畠作地へと土地利用の変換があったことが窺われる。

元弘3（1333）年、隠岐島を脱出した後醍醐天皇を迎えたのは名和長年である。名和長年の居城跡とされている名和公館跡伝承地をはじめ、的石、腰掛け岩、名和氏一族郎党の墓と言われる多量の五輪塔群など、後醍醐天皇や名和長年にまつわる旧跡が多数存在する。海岸段丘上には名和氏に協力した荒松氏によって築かれたと言われる富長城跡や長野城跡などの城跡が展開している。富長城跡は土塁が残存し、その保存状態は非常に良い。この時代の土豪の居館跡をよく残すものとして貴重である。この他にも「門前」「陣構」といった地名もあり、山城の存在が推測される場所もある。門前礎石群では礎石建物が検出されている。白磁・青磁・染付などがあり、中世以降の寺院跡の可能性が指摘されている。

## 9 近世以降

寛永9（1632）年に岡山藩主の池田光仲が鳥取藩主となり、明治維新まで池田氏の藩政が続く。御来屋は伯耆街道の宿駅で、藩倉も置かれるなど藩の運上米の積出港としても重要な位置を占め、汎入郡の中心地であった。

明治35年、山陰線が境～御来屋間を結んだ。大正天皇が名和神社に参拝された際に、名和駅ができ名和駅になった。昭和29年には御来屋村・光徳村・名和村・庄内村が合併し今日の名和町となった。現在では米子市の衛星町として、また中山町・大山村との合併が模索され、新しい町に向かい新たな歴史を歩みだしている。

（凌田）

### 【参考文献】

- 名和町誌編纂委員会編 1978『名和町誌』名和町誌編纂委員会  
門脇豊文ほか編 1999『門前第3遺跡発掘調査報告書』名和町教育委員会  
影山和雅編 2002『坪田遺跡発掘調査報告書』名和町教育委員会  
鳥取県埋蔵文化財センター編 1986『鳥取県の古墳』鳥取県教育文化財団鳥取県埋蔵文化財センター  
鳥取県埋蔵文化財センター編 1988『古石器・縄文時代の鳥取県』鳥取県教育文化財団鳥取県埋蔵文化財センター  
鳥取県埋蔵文化財センター編 1989『歴史時代の鳥取県』鳥取県教育文化財団鳥取県埋蔵文化財センター  
竹内理三編 1982『角川日本地名大辞典31 鳥取県』角川書店  
有限会社平凡社地方資料センター編 1992『日本歴史地名大系32 鳥取県の地名』平凡社

# 第3章 遺跡の概要

## 第1節 調査の方法

調査地は東西に伸びる丘陵上に位置する。この丘陵に並行して調査地をほぼ南北に分割するように山道がつくれられていた。そのためこれを境に、調査地を南北に分けて呼ぶことにする。表土剥ぎは名和町教育委員会による事前の試掘調査結果を受けて行ったが、全体的に表土が非常に薄いため、窪地部分や山道として使われていた部分、および平坦地の一部は人力で、そのほかは重機を用いた。

調査開始段階で排土置場予定地の立木が未伐採であったため、表土剥ぎは2回に分けて行わざるを得なかった。先に北西部分から着手し、立木伐採後南側から北東部にかけて行った。その後10m画の方眼測量を行い、方眼は南北軸に沿うように設定した。南北軸を北からアルファベットで、東西軸を東から数字で示し、1区画（グリッド）の北東隅の交点をとってそのグリッド名とした。検出した遺構・遺物の記録に当たっては平板、トータル・ステーションを用いた。また現場の写真撮影においては、35mm、6×7版を基本とし、道路状遺構の完掘写真については4×5版を用いた。

（中森）

## 第2節 概要

調査地はその大半が丘陵の平坦地である。その中央やや南よりに、尾根と並行し東西方向の山道があり、麓の長綱寺裏手に続く。地元の方によれば、この道は昭和初期まで伐採した樹木の搬出ルートとして使われていたらしく、その幅は5~13m、北側平坦面からの深さは最大で2.5mほどある。道の南北両側には平安時代の包含層

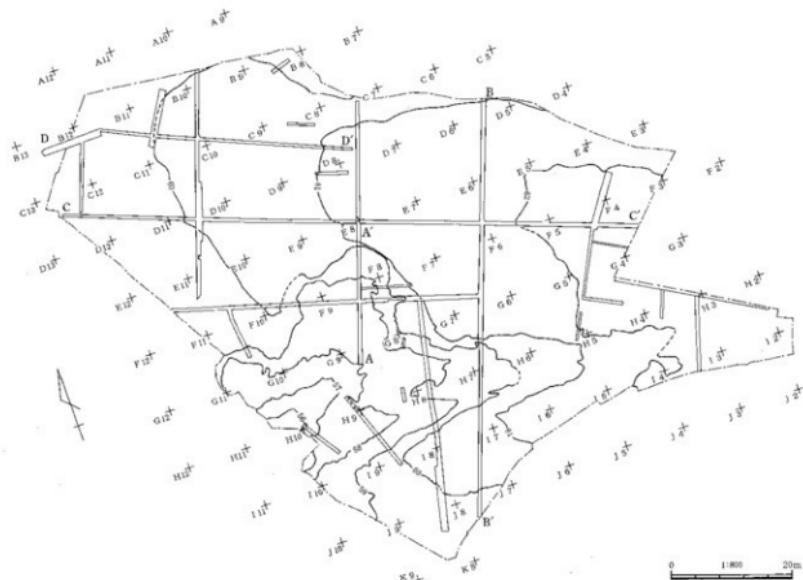


図3 グリッドおよびトレンチ配置

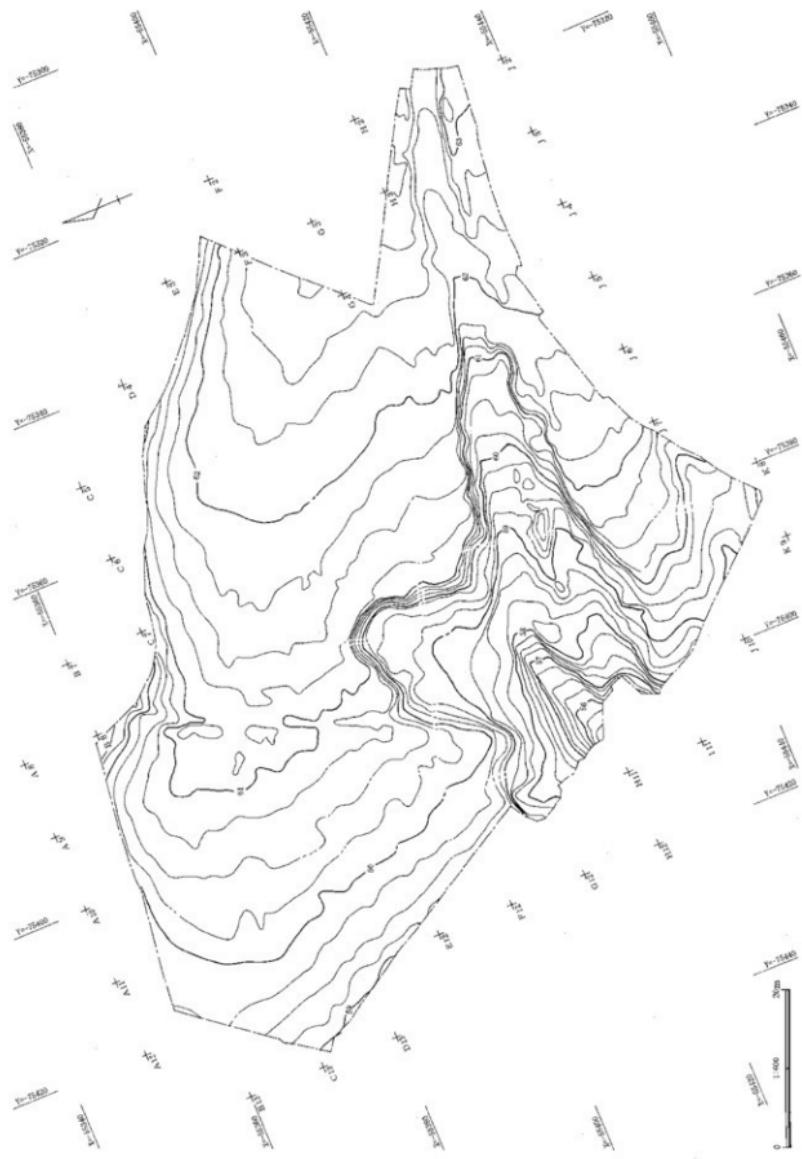


図4 調査前地形測量

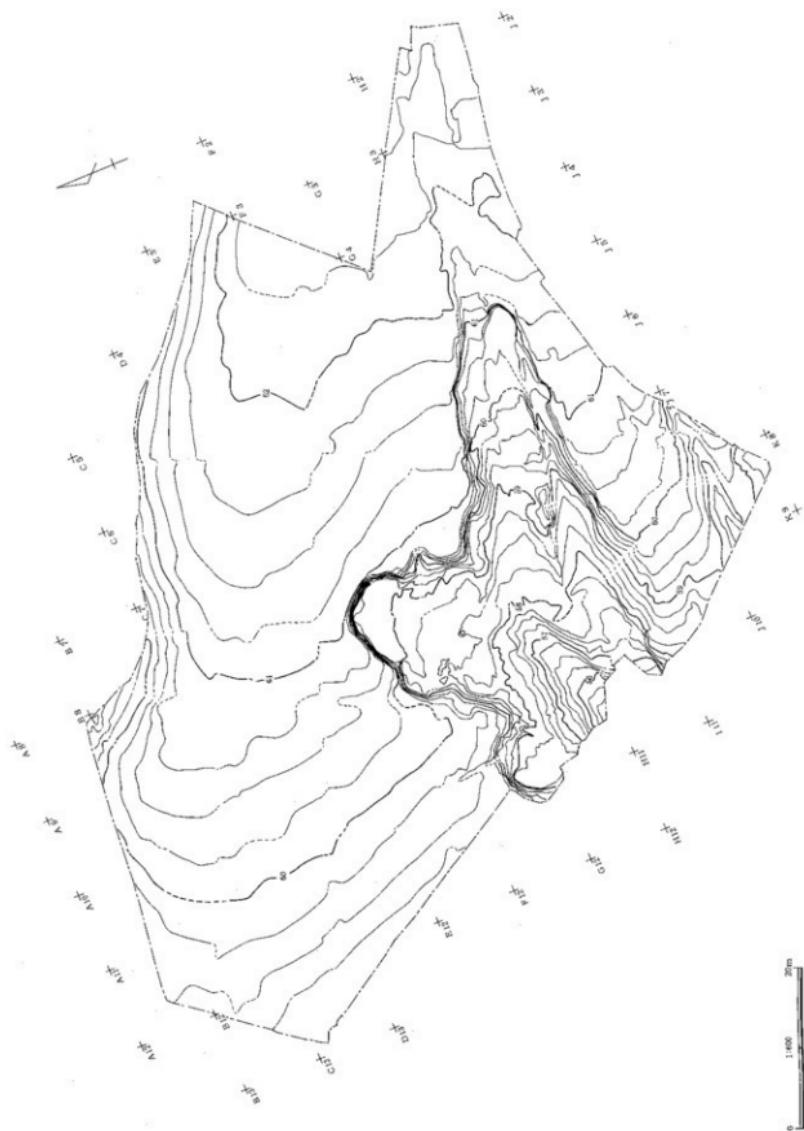


図5 調査後地形測量

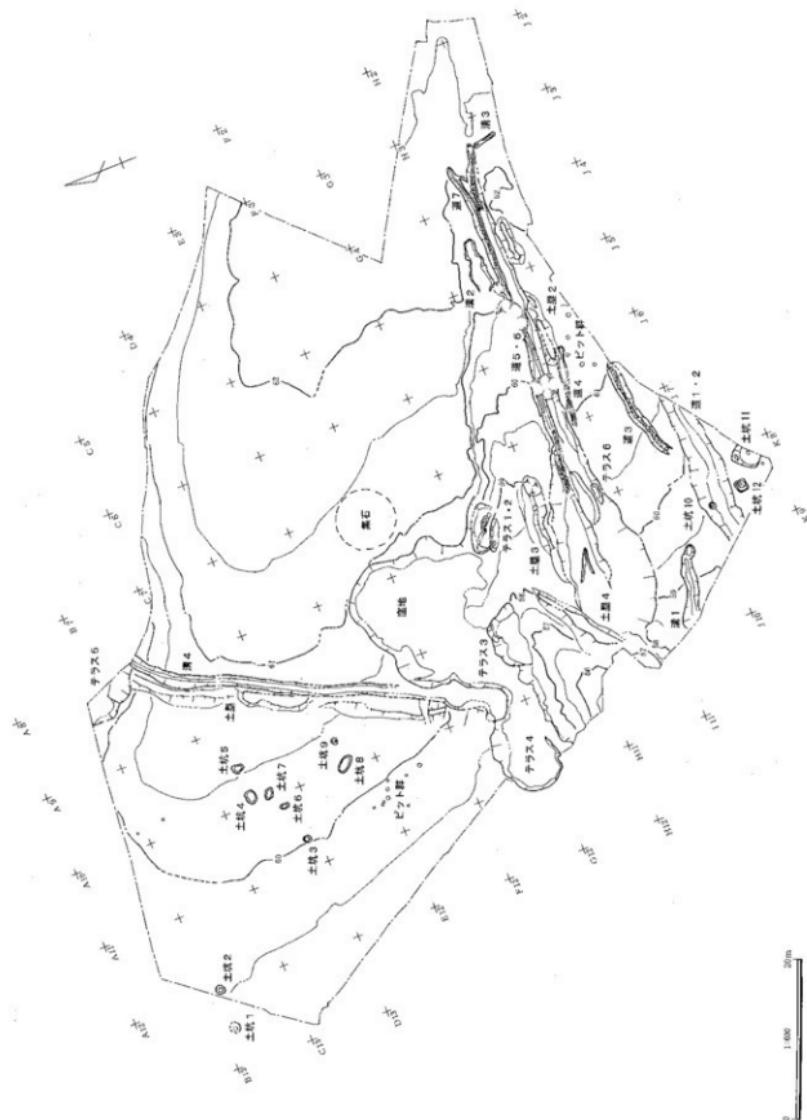


図 6 調査地内遺構分布

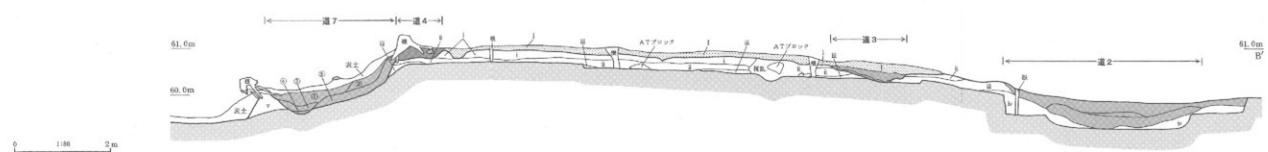
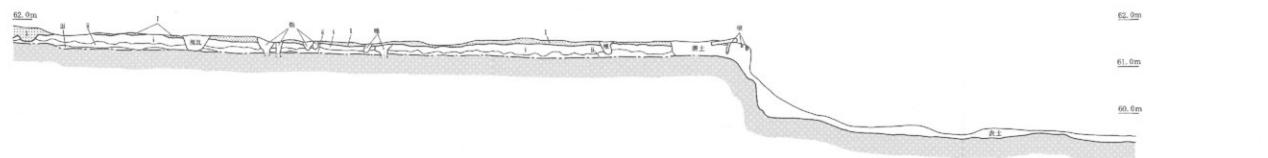
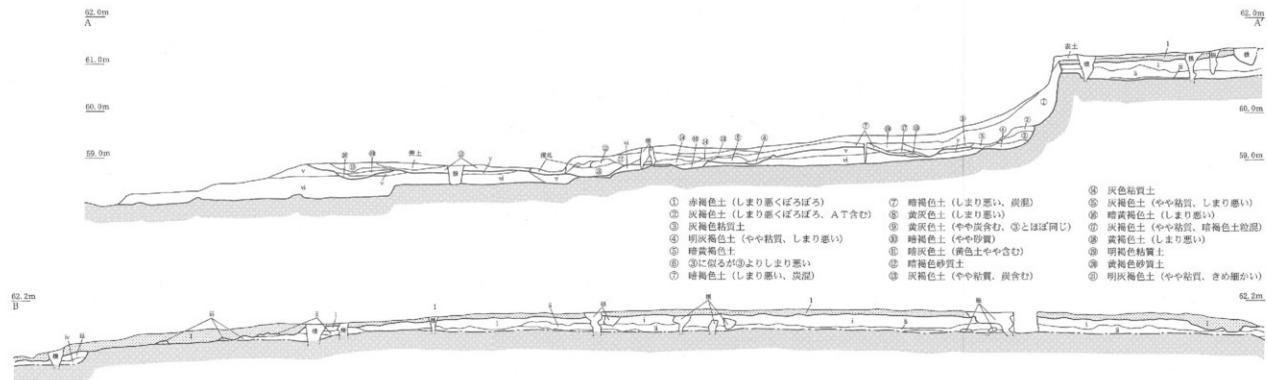


図7 調査地内土層断面（1）

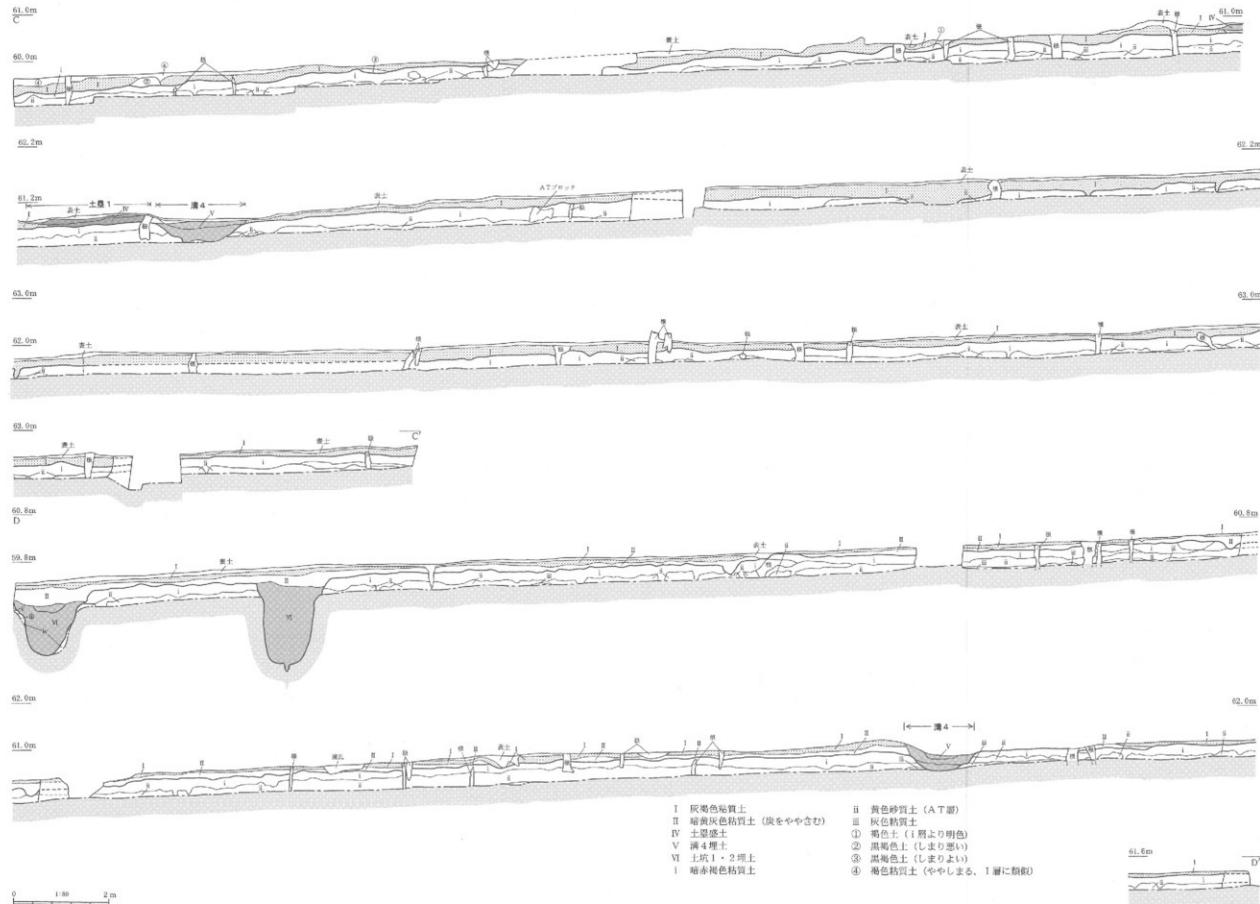


図8 調査地内土層断面 (2)

である I 層（次節参照）、および地山の i 層以下がほぼ並行して堆積しているが、この道の部分にはこれらの層がなかったことから、I 層上面から掘り込みつくられていることがわかった。また明治以降の磁器やビール瓶などが表土直下から出土し、時期的にも近代以降の掘削であることが判明した。しかし土星状に残された長さ12m の土壘 3 を挟んで南側は近世（道 7）、さらに部分的には平安時代に遡る道 5 を検出し、この東西方向の道が平安時代以降断続的に利用されたことが窺える。

近世後期は先の道のほか、土探し跡と考えられる250mほどの窪地や溝、炭焼窯跡（土坑12）などがあった。

平安時代には計 6 条の道を検出した。掘削の深さや底面の状況に差があり、そのあり方は一様ではない。道 1・2 のように切り合いをもつものもあり、同時に並存していたわけではないようである。しかし出土した遺物は非常に少ないものの、その主体となる時期は 8 世紀後半～9 世紀初頭であり、短期間のうちにつくりかえされたと想定できる。また鉄滓が調査地南東部を中心にまとまって出土していることから、鍛冶炉などの施設は検出できなかつたが、周辺にある可能性は高い。検出した道は鉄生産と関連したものと想定できようか。

縄文時代は調査地北西部を中心に遺物包含層がみられ、そこからは後期から晩期にかけての遺物が出土した。さらに同層下面で土坑、ピットを検出した。また調査地南端部においても土坑などがあった。

なお遺構名は調査段階と本報告で変更しており、その対照は下表のとおりである。

(中森)

新遺構名	旧遺構名	新遺構名	旧遺構名	新遺構名	旧遺構名	新遺構名	旧遺構名
道 1	SD 2	溝 2	SD 4	土坑 5	SK18	土坑 12	SK 7
道 2	SD 2	溝 3	SD 6	土坑 6	SK17	テラス 1	SS 2
道 3	SD 8	溝 4	SD 1	土坑 7	SK12	テラス 2	SS 3
道 4	SD 9	土坑 1	SK 1	土坑 8	SK10	テラス 3	SS 4
道 5・6	SD 3	土坑 2	SK 2	土坑 9	SK15	テラス 4	SS 5
道 7	SD 5・10	土坑 3	SK14	土坑 10	SK 8	テラス 5	SS 1
溝 1	SD 7	土坑 4	SK13	土坑 11	落込み状遺構	窪地	「虎口」

### 第3節 調査地内の堆積

調査地内の地形は、東から西にかけて若干下がっていく。その比高差は T 2 トレンチ（図 8 C-C'）で 3m ほどある。表土は非常に薄く 0.1m 前後であり、その下面が近世後期以降の遺構面となる。その下に調査地のほぼ全城にわたり、平安時代の包含層である I 層が拡がっている。近世後期の窪地から東および南では、この層以下は地山となっていたが、北西部に限り縄文時代後期～晩期の遺物包含層（II 層）があり、その上面が平安時代の遺構面であった。

概要は以下のとおりである。なお（ ）内は調査段階での旧層位名を示す。

- I 層（1a 層）：灰褐色粘質土。0.1～0.2m の厚さで調査地の平坦面に堆積。平安時代包含層。この下面から道などの遺構を検出。
- II 層（J 層）：暗黃灰褐色粘質土。部分的に細かい炭化物が混じる。縄文時代包含層。分布域は調査地内北東部にほぼ限定。
- III 層（T15-1 層）：灰褐色粘質土。細かい炭化物を含み II 層に類似。調査地南端部のみに堆積。縄文時代包含層か。<図 7 B-B'>

以下は地山の堆積層である。これらは名和衣装谷遺跡や茶畠第 1 遺跡など周辺調査地とはほぼ共通する。

- i 層（1 b 層）：赤褐色粘質土。しまりわるい。0.2～0.3m ほどの厚さで堆積している。
- ii 層（2、2' 層）：A T 火山灰層。黄色砂質土。部分的にブロック状。厚さは 0.1～0.2m ほどで堆積。
- iii 層（3 層）：灰色粘質土。
- iv 層（4 層）：赤褐色粘質土。0.6m 前後ともっとも厚い堆積をする。
- v 層（5 層）：黄色砂質土。ii 層と異なり、火山ガラスはほとんどない。白色粒子含む。
- vi 層（6 層）：黄褐色粘質土。直下は火碎流からなる岩盤。岩盤の石粒を含む。

(中森)

## 第4章 繩文時代の調査

### 第1節 概要 (図9)

当該期の遺物包含層であるⅡ層は、平安時代の包含層（I層）の直下にあり、調査地内北西部に拡がっていた（第3章図8）。そのほかの地内には包含層の拡がりは確認できなかったが、北東部分においては比較的多く遺物が分布していた。これらの中には時期を明確に示すものが少なかったが、磨消繩文土器や突帯文土器があつたため、概ね後期から晩期にかけてのものと考えられる。また同層および上層のI層から、石錘や磨製石斧などが出土している。

遺構についても北西部に分布の中心があり、とくに北西隅の名和町教育委員会による試掘トレンチにかかる2基の土坑、およびD10杭周辺の土坑群に2分される。遺構内から出土した遺物は非常に少なかったが、Ⅱ層下層検出であったことから時期を判断した。また調査地南隅においても遺物包含層は確認できなかったものの、平安時代の道路状遺構（道1・2）に切られる土坑や、道1・2の南側にある落ち込みはその堆積状況や埋土から平安時代よりも古いことは明らかであった。遺物が出土していないため明確ではないが、その埋土はⅡ層に類似していたこと、また本調査地内において平安時代より遡るものが縄文時代にはほぼ限られていたためここに含めた。

（中森）

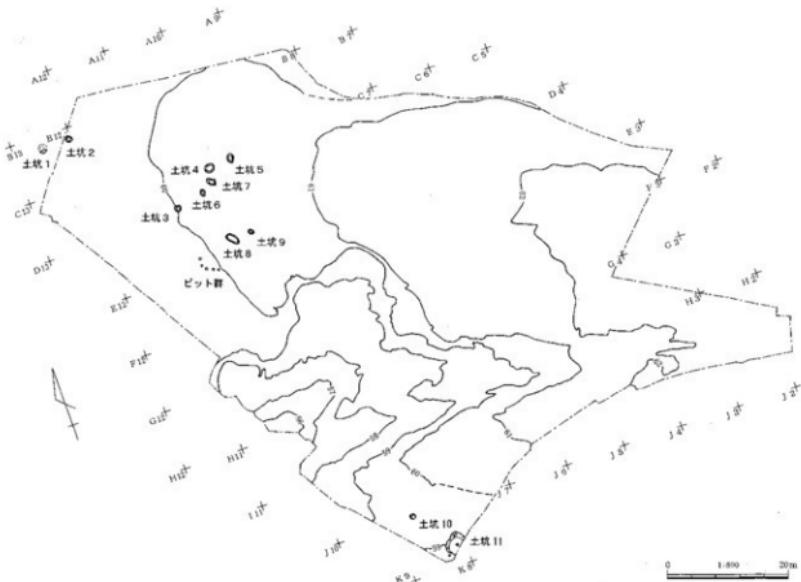
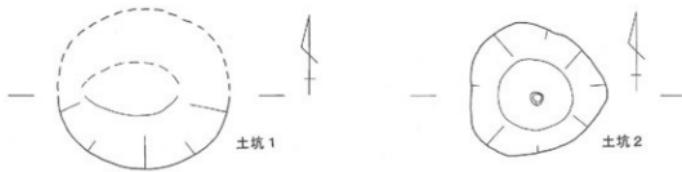


図9 縄文時代遺構分布

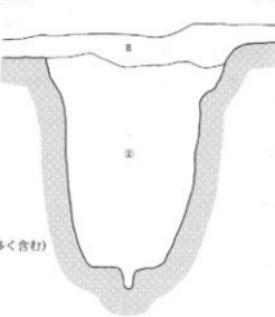


59.0m



- ① 黄灰色粘質土 (やや泥混)  
② 黑褐色土 (やや粘質、黄色土粒多く含む)

59.8m



0 1:50 1 m



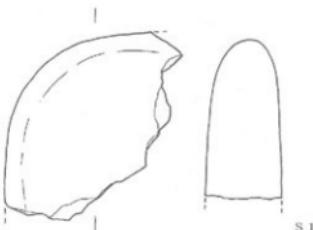
0 1:50 1.0m



fig. 1 土坑 1・2 (東から)



1



0 1:5 5 cm

図10 土坑 1・2 および出土遺物

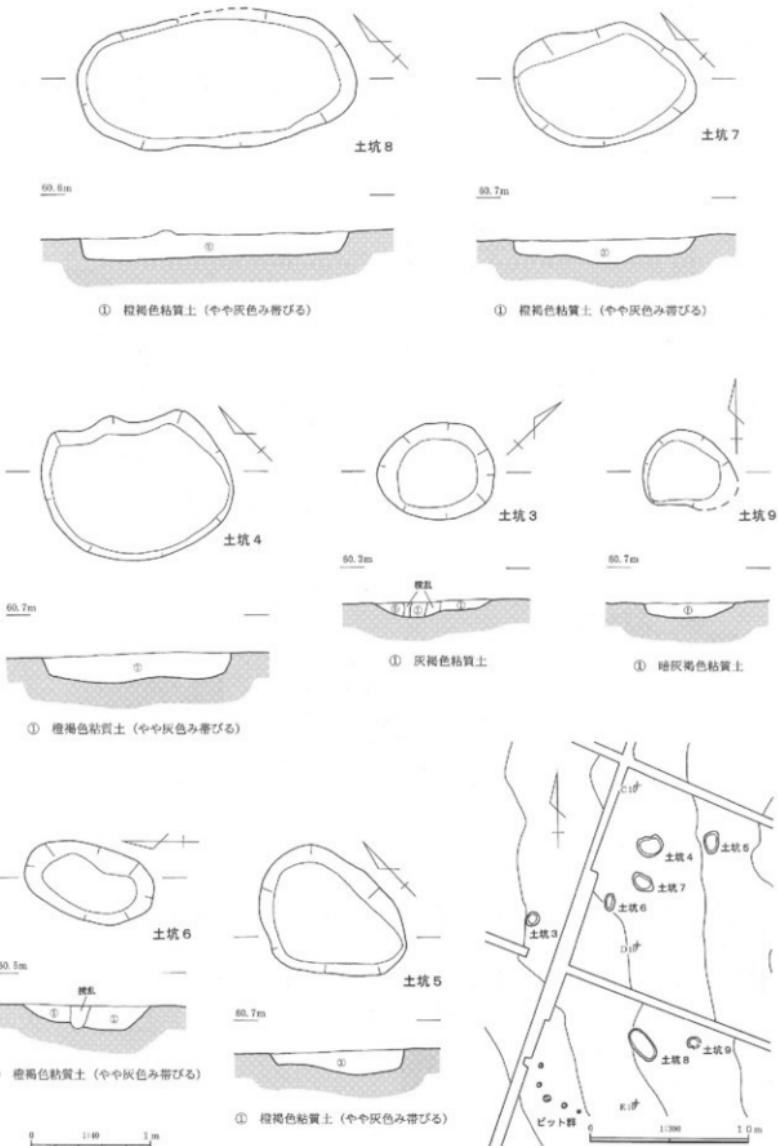


図11 土坑 3～9

## 第2節 検出した遺構と遺物

### 土坑1 (図10、図版3-1)

調査地北西隅の工事予定地内にあり、本調査前の名和町教育委員会による試掘調査にほぼ半分がかかるかっていた。調査地より外側に位置しすでに完掘されていたため、トレンチの断面観察、および現況の平・断面測量のみを行った。

残存径は1.35mで、ほぼ円形になると思われる。深さは約1.6mを測り、I層上面から掘り込まれている。土坑内上層0.4mほどはII層が落ち込むように堆積し、II層にやや炭化物が混じる①層を挟み、その下には黒褐色土がある。遺物は出土していない。  
(中森)

### 土坑2 (図10、図版3-2)

土坑1の東3.5mほどのところに位置する。やはりI層上面から掘り込み、II層に覆われる。径1.2mほどのやや不定な円形を呈する。深さは1.7mほどを測る。また底面中央に径0.2m、深さ0.25mほどのピットがある。埋土は土坑1とほぼ同じであった。遺物は埋土中程に粗製深鉢片(1)がまとまって出土したほか、上層を中心に石皿(S1)や黒曜石片などがあつた。

位置関係および埋土から、土坑1・2は同時期のもとのと考えられる。  
(中森)

### 土坑3 (図11)

C10グリッドの南西に位置する、長径1m、短径0.8mほどの土坑である。明瞭な掘り込みはなく、埋んだような状態であった。もっとも深い部分で0.1mほどである。遺物は出土していない。  
(浅田)

### 土坑4 (図11)

C9グリッドの北西に位置する。長径約1.6m、短径約1mの土坑である。底面はほぼ平らになっており、深さは平均して0.2mほどである。遺物は出土していない。  
(浅田)

### 土坑5 (図11、図版2-1)

C9グリッド北に位置する。長径約1.3m、短径約0.7mで橢円を呈する土坑である。底面には緩やかな傾斜があり、北西側が浅く、南東に向かって深くなっている。遺物は出土していない。  
(浅田)

### 土坑6 (図11、図版2-3)

C10グリッドの南東に位置する。長径約1.1m、短径約0.6mの大きさで南北に長い楕円形をした土坑である。深さは0.2mほどである。遺物は出土していない。  
(浅田)

### 土坑7 (図11、図版2-4)

C9・10グリッドにまたがる土坑である。大きさはおよそ長径1.5m、短径1mでやや菱形を呈する。底面はほぼ平らになっている。  
(浅田)

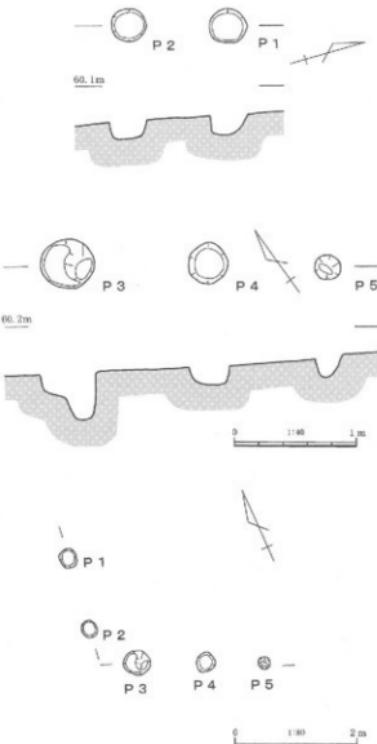


図12 ピット群

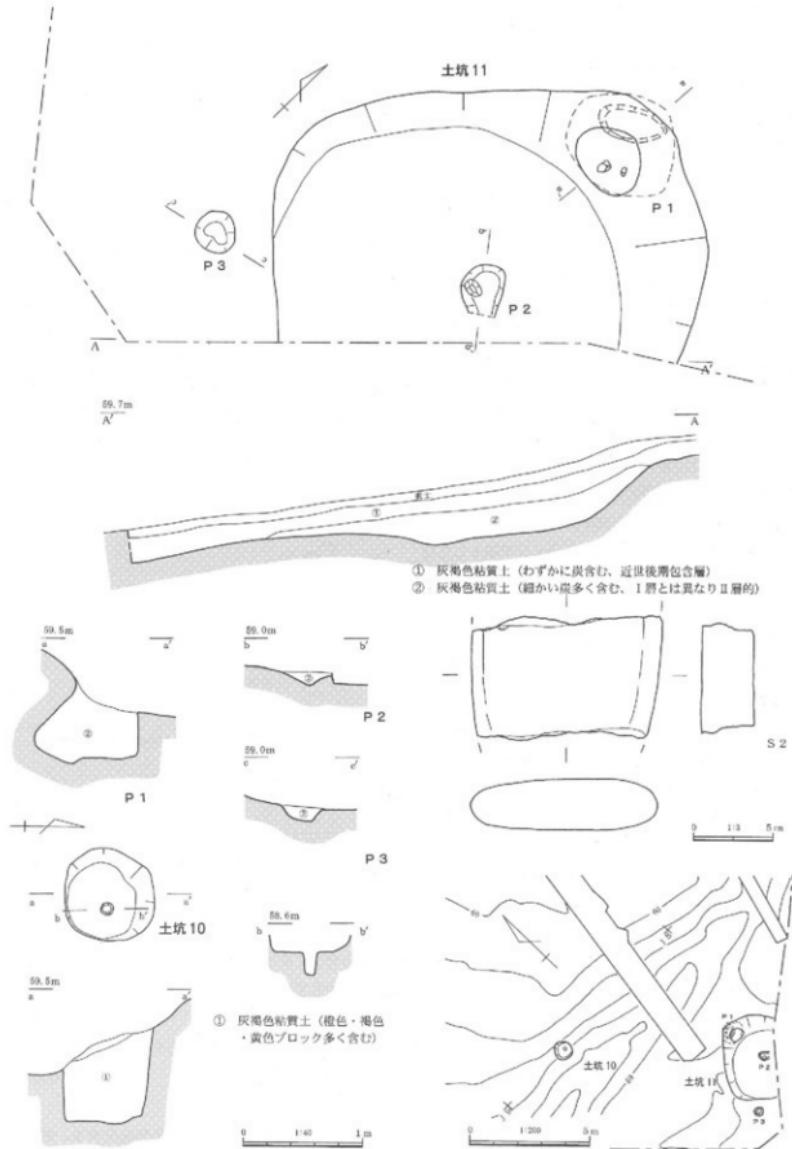


図13 土坑10・11および出土遺物

### 土坑8 (図11、図版2-2)

D 9・10グリッドにまたがって位置している。大きさはおよそ長径2.2m、短径1.2mの細長い楕円を呈した大型土坑である。深さは0.18mほどで平らになっている。

(浅田)

### 土坑9 (図11)

D 9グリッドの南西に位置する土坑である。径は約0.6mを測り、深さは0.1mほどである。遺物は出土していない。

(浅田)

### ピット群 (図12)

D 11グリッドの中央やや東より、土坑群の南側に位置するところから5基のピットをまとめて検出した。これらはP 3を中心、やや開き気味のL字形に並ぶ。P 3以外は径0.2~0.35mほどの円形を呈し、深さは0.15~0.2mと浅い。P 3は径0.45mほどの円形で2段に掘り込まれる。もっとも深くて0.4mを測る。埋土はいずれもⅡ層であった。

上記遺構群はその埋土から同時期のものと考えられるが、土坑群はそれぞれ形状が異なり、かつその配列にも規則性は認められない。遺物もほとんど出土しておらず、性格についても判断できない。

(中森)

### 土坑10 (図13、図版3-3-3)

I・J 9グリッド境に位置し、平安時代の道1・2の北側壁に切られる。径0.8mほどのほぼ円形を呈し、深さは約0.8mであった。底面の中央やや東により径0.1m、深さ0.2mのピットがある。埋土は灰褐色粘質土で、後述する土坑11と類似する。遺物は出土していない。

(中森)

### 土坑11 (図13図版3-4・5)

J 8グリッド、調査地最南端にあり、遺構南東部は調査地外にのびる。土坑10からは約6m南東に位置する。北から南にやや傾斜するところに立地し、さらに1層によって南側は削平された可能性も考えられる。残存で長径は3.5mほどを測る、ほぼ方形を呈した堅穴状の落ち込みである。深さは約0.6mで、底面自体もやや南へ向け傾斜している。底面の中央部に、長径0.5m、短径0.35m、深さ0.1mほどの平面楕円形を呈するP 2があった。また遺構北側隅には、上場で長径約0.6mの楕円形を呈し、北側に向かって拡がる断面袋状のP 1を検出した。埋土は両ピットとも土坑と同じく細かい炭を含む。さらに遺構南側にP 3を検出したが、埋土が同一であったことから、おそらく土坑と関連すると思われる。しかしこれらピットに規則的な配列などは見出せず、この土坑の性格は不明である。なお埋土上層から、両端が打ち欠かれたような扁平な礫(S 2)が出土した。やや磨滅した面をもつあまり顕著ではない。

(中森)

### 遺構外出土遺物 (図14・15、図版4)

全体に遺物量は少なく、図示できるものもごくわずかであった。土器では2~7は後期のものである。2は粗製の深鉢の口縁部。3は肥厚した口縁部で、波長部付近の破片である。口縁下には横位の沈線があり、その下にR Lの縞文が施される。福田K 2式に相当すると思われる。4・5は深鉢頭部付近の破片で沈線が施される。6は深鉢胴部破片。7は底部である。これらの土器は概ね後期前半の範疇に納まるものであろう。

8~10は晩期後葉の突帯文土器である。8・9は口縁部に巡らされた突帯上にD字状の刻目を施す。10は無文。11・12は、粘土を握り固めたような形状を呈した粘土塊である。時期は異なるが、米子市古市宮ノ谷山遺跡の土器窯から出土した焼成粘土塊(平安時代、註1)に類似する。2点はC10グリッドのⅡ層中から近接して出土した。

石器は黒曜石製鏃や剣片があったほか、比較的石錘が多くみられた。S 3~S 6は石錘である。石材はいずれも安山岩であった。また磨製石斧が2点あった。S 7は小型の完形品で、上部側面に浅い抉りが入っている。粘板岩製。S 8は基部が欠損する。S 9~S 11は黒曜石である。

(中森)

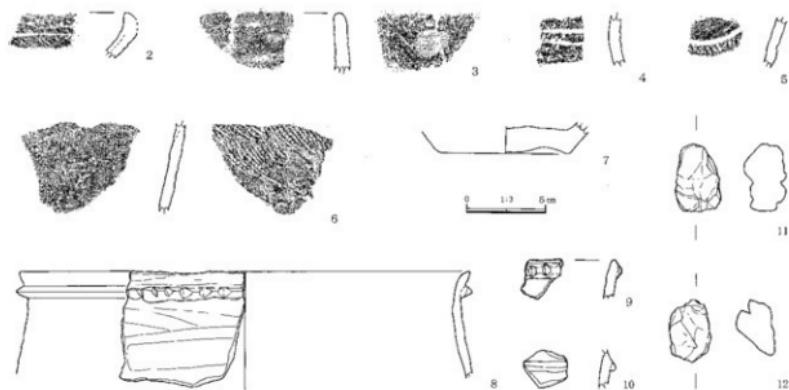


図14 遺構外出土遺物（1）

表1 繩文時代土器・土製品観察表

遺物番号	捕図	地層	区構	種別	器種	口径(cm)	器高(cm)	特徴	胎土焼成	色調	備考
1 10	土坑2	縄文	深鉢	—	△6.0	外面部ケズリ、内面部ケズリ後ナデか。	粗やや軟	暗褐色			
2 14	E 5・I層	縄文	深鉢	—	△2.9	内面部ナデ。口縁部肥厚し上方に向く。外面部厚部磨滅。その下に2条の沈線あり。2本目の沈線以下縄文。	やや粗やや軟	淡黄褐色			
3 14	F 5・I層	縄文	深鉢	—	△3.6	外面部ケズリ、内面部ナデ。	粗やや軟	淡褐色			
4 14	B 8・I層	縄文	深鉢	—	△3.1	外面部ともナデ。外面部に纏い2条の沈線。	やや粗やや軟	淡黄褐色			
5 14	E 6・I層	縄文	深鉢	—	△3.1	外面部ともナデ。外面部に弧状の沈線。その下に纏文が施される。	やや粗やや軟	橙褐色			
6 14	C 5・I層	縄文	深鉢	—	△5.5	内面部ナデ、外面部縄文。	やや粗やや軟	淡黄褐色			
7 14	D 8・II層	縄文	深鉢	—	△2.0	底部片。内面部ナデ。底面はやや壅み、被熱している。	やや粗やや軟	淡褐色			
8 14	C 9・I層	縄文	深鉢	*28.8	△6.7	内面部ナデ、外面部はケズリ。口縁端部はやや外反し、1cm下がったところにD字刻みをもつ突帯が貼り付けられる。	やや粗やや軟	淡褐色			
9 14	D 8・I層	縄文	深鉢	—	△2.5	内面部ナデ。口縁端部からわずかに下がったところにD字刻みをもつ突帯。	やや粗やや軟	淡褐色	胎土分析 資料No.1		
10 14	B 9・II層	縄文	深鉢	—	△2.5	内面部ナデ。口縁端部欠損。端部に接して、下垂した無刻み突帯が付く。	やや粗やや軟	淡黄褐色			
11 14	C 10・II層	縄文	被熱粘土塊	—	2.9	表面は全体的に凹凸が激しく、部分的に平面橢円形状の穴が開く。	やや粗やや軟	淡褐色			
12 14	C 10・II層	縄文	被熱粘土塊	—	2.6	表面は全体的に凹凸が激しいが、裏面のみ平坦。	やや粗やや軟	淡褐色			

(註1) 中森 祥ほか編 2002『古市遺跡群』3 島根県教育文化財団

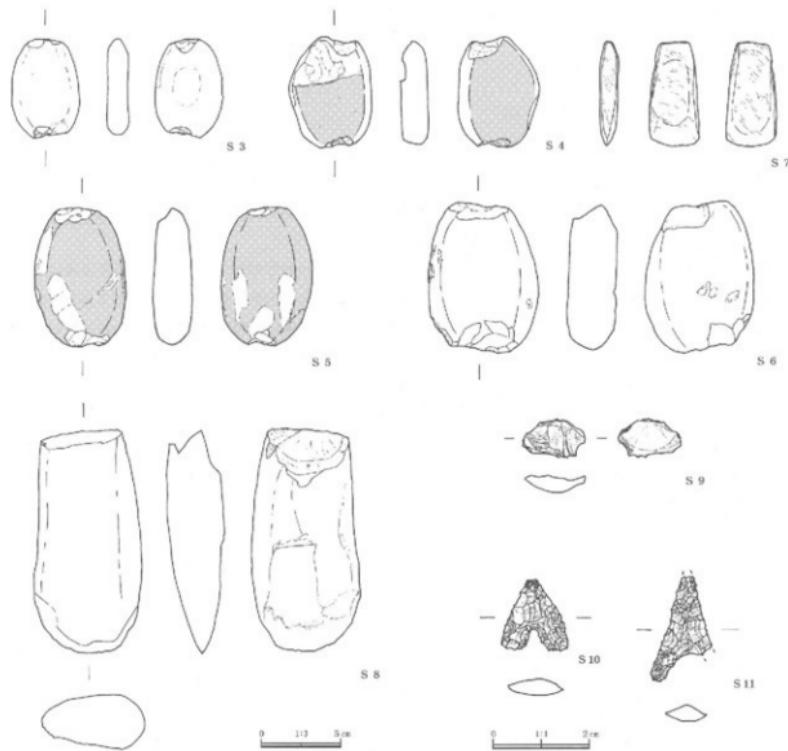


図15 陶構外出土遺物（2）

表2 繩文時代石製品観察表

遺物番号	挿岡	地区・遺構	種別	石 材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	備 考
S 1	15	土坑2	石皿	安山岩	△15.0	△14.4	6.1	*1700	
S 2	15	土坑1 1	不明	安山岩	△7.7	12.0	3.4	*540	
S 3	15	E 5・I層	石鍤	安山岩	6.2	4.3	1.5	52.0	
S 4	15	F 5・I層	石鍤	安山岩	6.9	5.2	1.7	85.5	表裏面磨滅
S 5	15	道1・2、①層	石鍤	安山岩	8.7	5.7	2.5	167	表裏面磨滅
S 6	15	B 9・I層	石鍤	安山岩	9.4	6.9	3.1	250	
S 7	15	C 10・I層	磨製石斧	粘板岩	6.5	3.1	1.1	40.4	
S 8	15	G 4・I層	磨製石斧	緑色片岩	△13.8	6.8	3.5	*470	
S 9	15	E 10・II層	剥片	黒曜石	2.4	3.9	1.1	9.3	
S 10	15	F 4・I層	石鏟	黒曜石	1.5	2.5	0.3	0.4	
S 11	15	F 9・I層	石鏟	黒曜石	△2.2	△1.3	0.4	*0.6	

## 第5章 平安時代の調査

### 第1節 概要 (図16・17)

本遺跡の中心となる時代である。近世後期の遺構面下に堆積するI層は、調査地のほぼ全域に亘る本時代の遺物包含層である。この下面に遺構があるが、主に調査地南側に集中し(図17)、道路状遺構5条、ピット4基を検出している。これらピットは一部I5・6グリッドにおいて並ぶものもあったが、明確に建物を構成するようなものは検出できなかった。

道路状遺構には2種類あり、溝状に掘り込まれた底面が硬化しているものと、底に径0.3m前後の浅いピット(波板状凹凸面)が連続するものであった。これらは尾根と並行し、東西方向でほぼ直線的に伸びている。道1・2のように明らかに切りあい関係をもつものがあり、これら遺構が一時期の所産でないことがわかる。しかし、出土した土器などはそれほど大きな時間的隔たりを示すものではなく、このことから短期間のうちにつくられたと考えられる。ただそれぞれの関係については不明である。

また遺物も量こそ少ないものの、調査地南側に集中する傾向がある。この中には鉄滓を含み、楕円形鍛冶津を主体とし、30点ほどではあるが調査地南東部において密に分布していた(第7章特論2図36)。鍛冶炉などは検出できなかったが、これら遺物が出土していることから、調査地外にそうした施設が近在していることが考えられる(第7章特論2参照)。

(中森)



図16 平安時代遺構分布

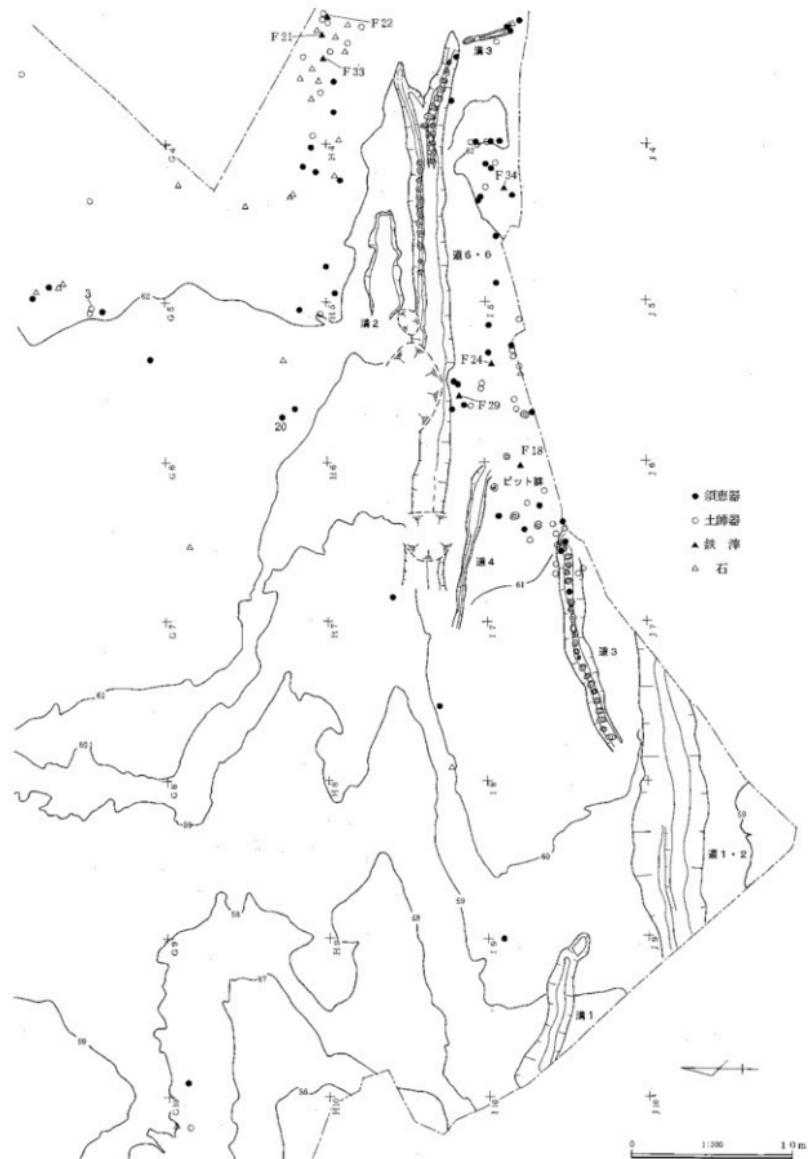


図17 調査地南側遺構分布

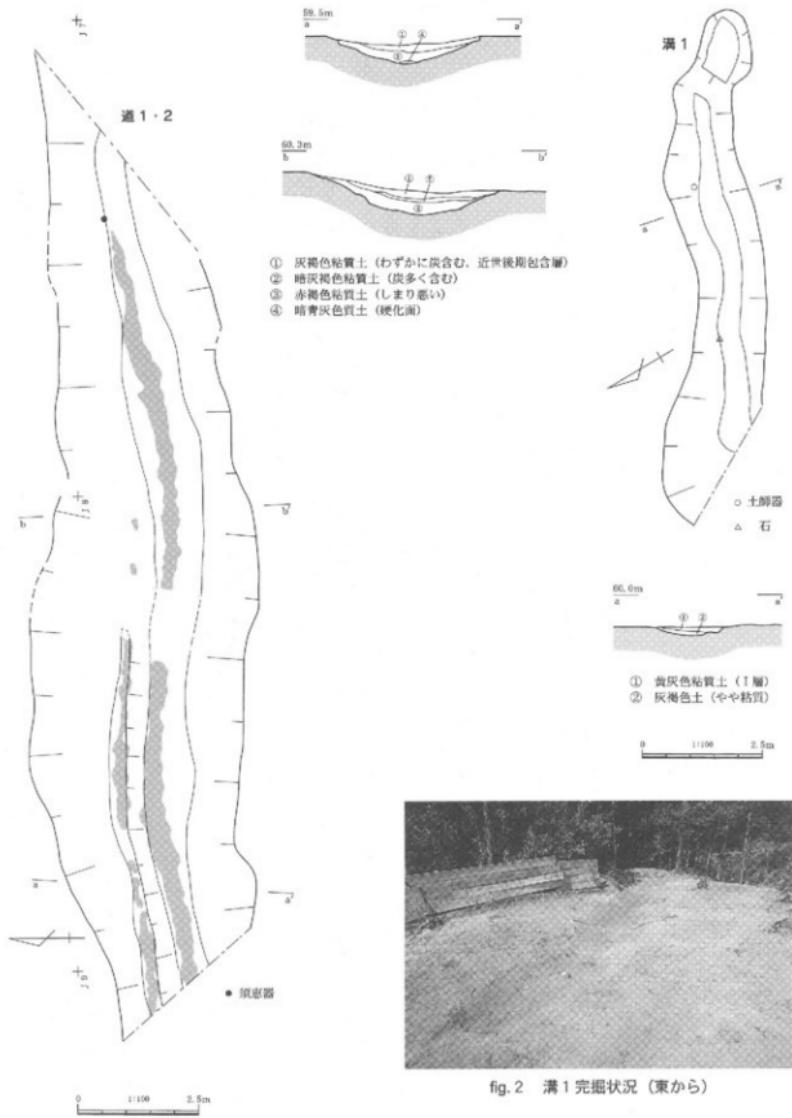


fig. 2 溝 1 完掘状況（東から）

図18 道 1・2、溝 1

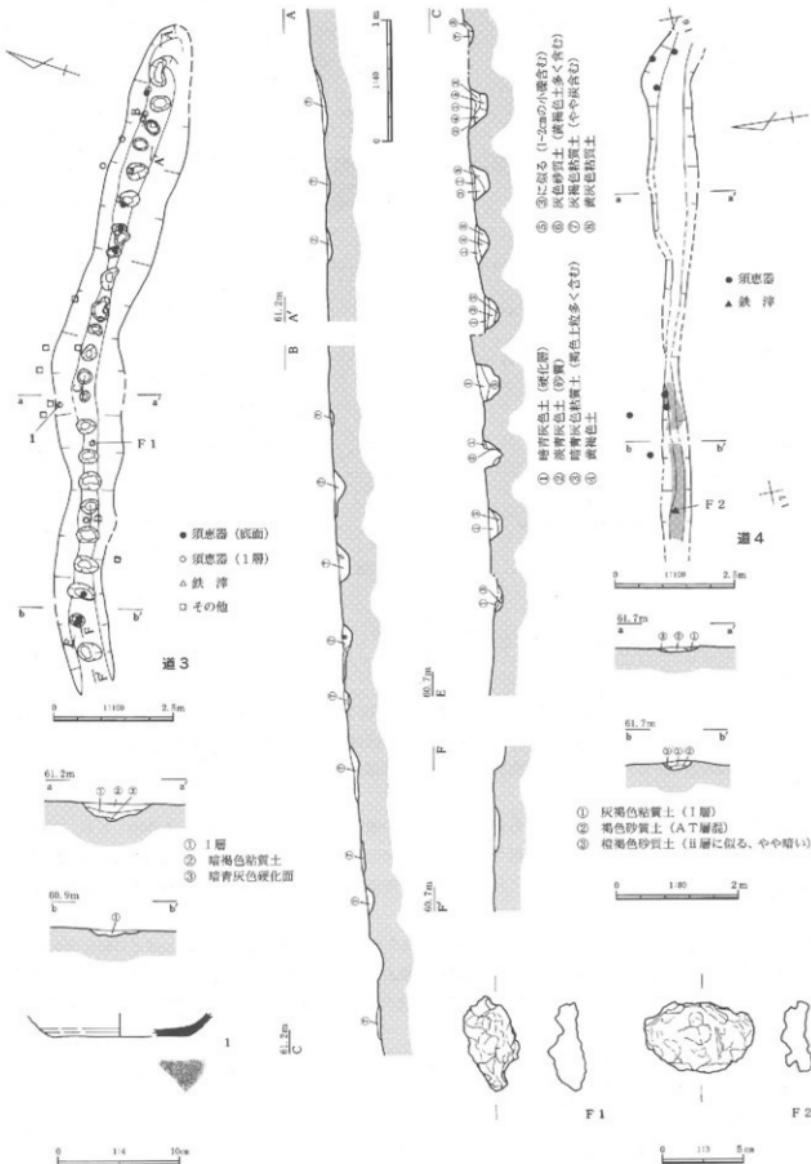


図19 道3・4および出土遺物

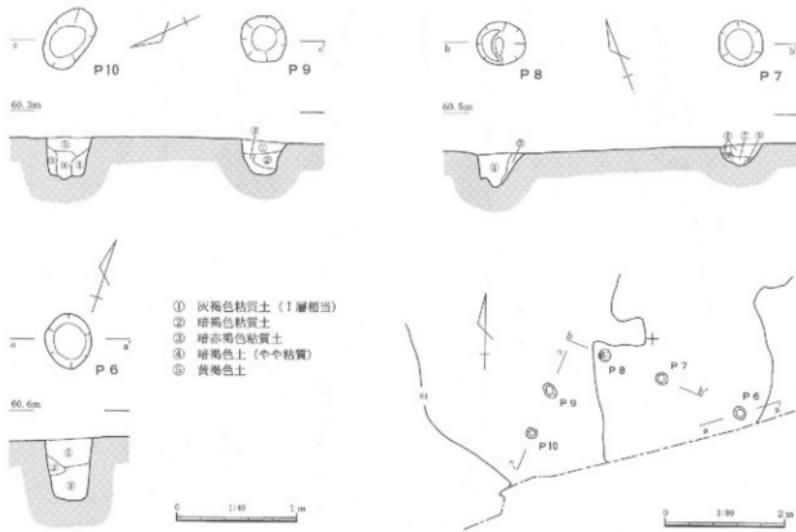


図20 ピット群

## 第2節 検出した遺構と遺物

溝1 (図18、fig.1)

道1・2の北約5mのところにある。やや蛇行気味のもので、西は調査地外へと続く。幅は東で1m、西で2mほどと西側のほうが広くなっている。深さは0.2~0.3mと浅い。底面に硬化した部分などはなかったため溝とした。遺物は非常に少なく、I層下面で検出したことから時期を判断した。  
(中森)

道1・2 (図18、図版5・6)

調査地南端に位置し、ほぼ東西方向でわずかに蛇行気味の溝状を呈する。長さ約20.6mを検出したが、東西両端は調査地外へと伸びる。上場の幅は一様ではなく3.0~4.4mを測る。北から南へかけて傾斜する尾根の地形変換点近くにあるため、北側肩が高くなっている。そこから底面まではもっとも深くて1mほどある。底面にはやや蛇行する硬化面があった。幅は0.3~0.4mを測る。

この北側壁面上場から0.5mほど下がった斜面部に、長さ10.5mにわたって幅0.2~0.3mほどの硬化面を帯状に検出した。この硬化面は溝西端から始まり、溝の中央部あたりで途切れる。この状況からこれは先述の道に切られたものと考えられ、これを道1、そして切っているほうを道2とした。道1の本来の規模は不明であるが、上場の幅が3m前後のものであったと推測できよう。

埋土の状況や出土遺物からこの2基は、大きな時期差はもないと考えられる。

(中森)

道3 (図19、図版5)

若干弧状を呈するもので、上場の幅は1~1.5mほどを測る。深さは0.1~0.3mの浅い溝状で、底面は部分的に硬化していたほか、23基のピット（波板状凹凸面）が連続していた。ピットは概ね0.3~0.5mの楕円形形状を呈し、東側からP1~P14は0.05~0.1cmと非常に浅いのに対し、P15~P21は0.15~0.2mとやや深い。また後者は埋土上面が暗青灰色土で、硬くしまっていた。その下層は粘質土や砂質土で、遺物は含まない。一方前者はやや

炭を含む灰褐色粘質土で、ほぼ埋土は同じであった。

遺物は少なく、土師器、須恵器の細片が多い。13は須恵器杯の底部。楕円形鉛治溝（F1）が溝埋土中より出土している。

(中森)

#### 道4 (図19、図版5・6)

H5グリッドの南端部に位置する、東西方向のほぼ直線的なもので、検出した長さは約10.5mである。深さは0.2mほどの浅い溝状で、A T火山灰層であるⅡ層上層まで掘り込まれている。西側半分においては、その底面が硬化していた。上場の幅は西側で0.5m、東側では1mほどであった。遺物は少なく埋土中から須恵器片のほか楕円形鉛治溝（F2）が出土している。埋土上層はI層で、下層はⅡ層が混じる砂質土であった。

(中森)

#### ピット群 (図20)

I5・6グリッドにおいて5基のピットを検出した。ほぼL字状にあるが、掘立柱建物跡となるような規則的な配列にはならない。ただし南側はすぐ調査地外になり、そこに関連するものがある可能性は考えられる。

ピットはいずれも径が0.4mほどの円ないしは梢円形を呈し、P7が0.2mと浅かったほかは0.3～0.5mほどのものであった。遺物は出土しておらず、埋土および検出面から時期を判断した。

(中森)

#### 道5・6 (図21・22、カラー図版2)

約36mにわたって検出した、ほぼ東西方向に軸を探る直線的なものである。西側は近世の道である道7により削平され途切れる。また東端で二股に分岐する。幅は2.4mほど、深さは0.3～0.4mで、断面は逆台形の溝状にⅣ層まで掘り込まれている。底面には南北両側に浅い溝が掘られており、北側を道5、南側を道6とする。

道5は幅0.8mを測り、東側の二股に分岐するところから西へ向け12基の浅いピット（波板状凹凸面）が連続する。ピットは径0.2～0.3mの梢円形で、深さは0.05～0.1mと非常に浅い。埋土は一様にしました砂質土で、小縫や数cmの須恵器片を含む。

道6は道5ピット列東端辺りから東へ向かって伸びる。東側はわずかに弧状に南へ向く。ピットは13基を検出し、いずれも長径0.4mほどの梢円形を呈する。埋土は道5と共に、ピット底面にも硬化したものがある。また屈曲部あたりのもの（P5～P7）は切りあっていると考えられるが、明確な切りあい関係についてはわからなかった。

これら道の間の平坦面はⅣ層であり、非常に硬化していた。溝内は0.05～0.15mの厚さの層が互層状に堆積しており、底面上には黄灰色土（⑥層）がある。この上面も部分的にはあるが硬化しているところを検出した。土層断面B-B'をみるとこの⑥層を切って道5、6ともつくれていることがわかる。

出土した遺物は細片が多く、図化できるものは非常に少ない。14～16は須恵器杯。体部外面はつるつるしている。17は高台付き杯で体部は打ち欠かれ、さらに底部は穿孔されたものと考えられる。また底面は非常に磨滅している。18は須恵器腹片。F3は流動溝、F4～F7は鉛治溝である。これら鉄溝は底面から浮いた土層中から出土した。

(中森)

#### 溝2 (図21、カラー図版2)

道5・6の北側に隣接する不定形な溝である。検出した長さは約6.5m、幅は1.2～2.1mを測り、北側に人頭大ほどの縫が並ぶ。埋土は道5・6と同じであったが、底面に明瞭に硬化した跡や施設がみられなかつたことからここでは溝として扱った。埋土からは須恵器細片がわずかに出土しただけである。堆積状況から道5・6と同時並存していたと考えられるが、その性格については不明である。

(中森)

#### 溝3 (図21)

道6南東端部の南側に位置する。ほぼ南北方向を向くもので、北端部がやや蛇行する以外は直線的である。検出した長さ2.9m、幅0.25mほどである。また深さは0.05mであるが、調査段階で掘り込み面を飛ばしてしまっており、本来はさらに0.1mほど深かったと考えられる。遺物は土師器の細片が出土している程度である。I層下面から掘り込まれている。

(中森)

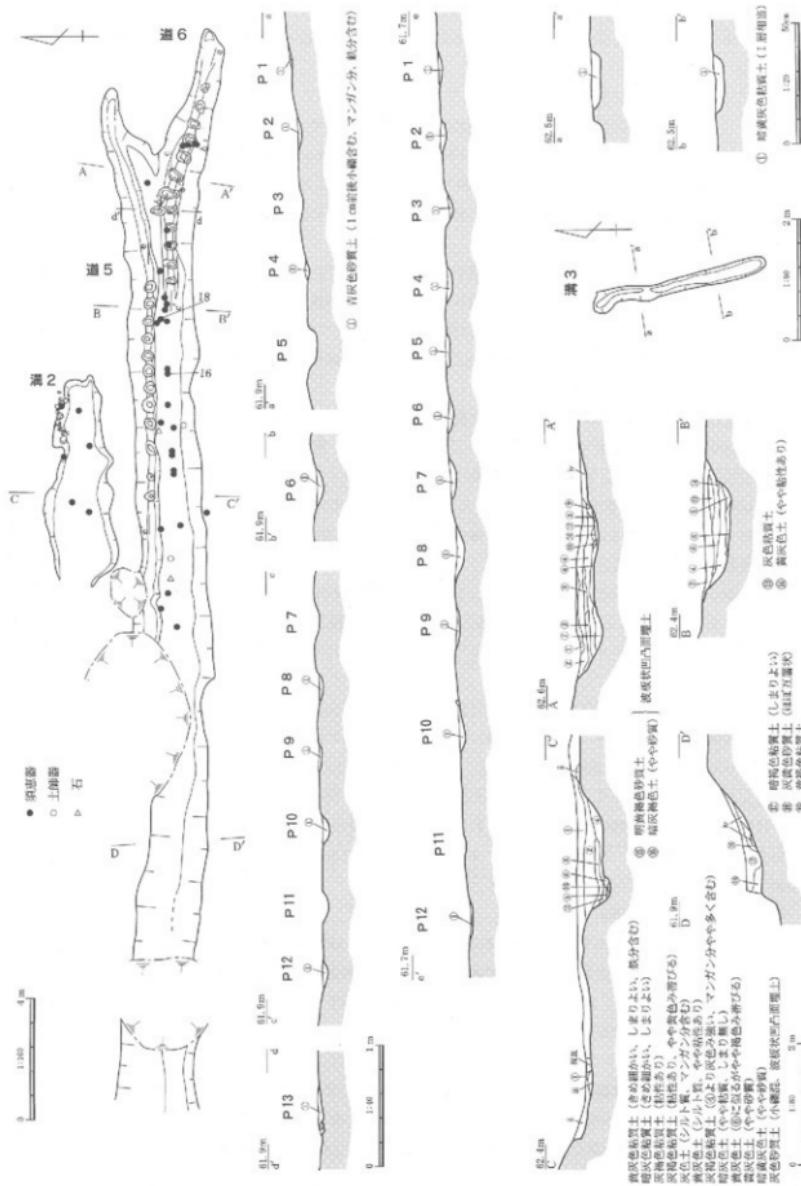


図21 道5・6、溝2・3

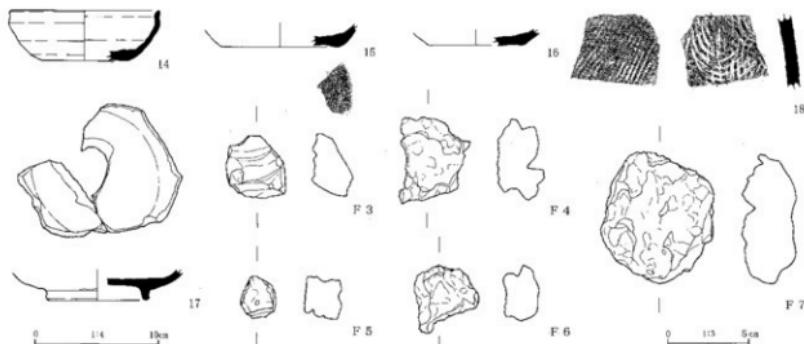


図22 道5・6出土遺物

表3 遺構内出土土器観察表

遺物番号	採取場所	地盤区分	種別	器種	口径	器高	特徴	胎土焼成度	色調	備考
13	道3	須恵器	杯	—	△1.9	—	底部静止糸切り。	密良好	淡青灰色	
14	道5・6	須恵器	杯	*12.2	4.1	—	口縁部屈曲し、端部はやや尖り気味。端部内面はつるつるする。底部回転糸切り。	密良好	淡青灰色	胎土分析資料No.9
15	道5・6	須恵器	杯	—	△1.9	—	底部回転糸切り。やや底面を呈す。	密良好	暗灰色	
16	道5・6	須恵器	杯	—	△1.3	—	底部回転糸切り。唐突し、破面に鉄分付着。	密良好	淡青灰色	
17	道5・6	須恵器	高台付杯	—	△2.5	—	体部から上欠損。底面は裏側から穿孔される。底部静止糸切り後ナメ消し。底部内面つるつる。また体部外面もややつるつる。	密良好	淡灰色	胎土分析資料No.10
18	道5・6	須恵器	甕	—	△5.9	—	外面平行、内面は同心円タクキ。	密良好	暗灰色	

表4 遺構内出土製鉄関連遺物観察表

遺物番号	遺物名	地区	層位構造	特徴	量	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	磁着度	メタル度
F 1	楕形鍛治済 (含鉄)	I 7	道3①層	二段気味の楕形鍛治済の側部破片。上面と右側部が生きており、側部一部が窪む。下面破面よりにサビ色が強い。一帯に鍛冶炉の炉床土固着。	3.1	5.5	2.7	49.8	4	鈍化(△)	
F 2	楕形鍛治済?	H 7	道4	分析資料3	—	—	—	—	81.5	5	なし
F 3	溶融渣	H 3	道5・6	分析資料1	—	—	—	—	55.0	2	なし
F 4	楕形鍛治済	H 4	道5・6	やや厚手の楕形鍛治済の中央部破片。上面は平坦気味で側部は大きめの浮出痕のため出入口が濃い。下面はゆるやかな波動状の浮出痕。明褐色の石粒をかみこむ。上下逆の可能性もあり。	4.7	7.1	3.5	89.0	3	なし	
F 5	鍛治済	H 4	道5・6	上下面が平坦気味の楕形鍛治済の側部破片。密度が高いが側面には1~2cmの大木炭痕が多い。下面是小さな波動状。右側部はソコソコしている。	2.3	2.4	1.9	21.4	2	なし	
F 6	楕形鍛治済	H 3	道5・6	含鉄の楕形鍛治済の側部破片。上面は木炭痕で窪み、側部は波動状の傾斜面。下面是粉灰質と炉床土の混在。	3.7	3.8	2.4	44.6	3	鈍化(△)	
F 7	楕形鍛治済 (中・含鉄)	H 3	道5・6	肩部が小破片となつた含鉄の楕形鍛治済。上面は凹凸が激しく深いくぼみも立つ。肩部は小破片で傾斜方向に下面は突出気味。各面ともサビ色と津波が発生。	6.8	8.1	3.6	245.0	5	鈍化(△)	

遺構外出土遺物 (図23・24、図版6・7)

19~26は須恵器である。19・20は杯蓋。19は低い環状つまみが付く。21~23は杯身。21・22は底面回転糸切りである。24は低い高台が付く。25は壺の口縁部。26は横瓶である。右側部に細い輪状の圧痕があり、成形時に土器を載せた台(高台)の痕跡ではないかと考えられる(fig.3)。破片はB 8・9グリッド南側に集中していた。これら須恵器は陰田10期(8世紀後半、註1)から古市宮ノ谷山I期(8世紀末~9世紀初頭、註2)に位置づけられるものであろう。27は底部回転糸切りの須恵器杯。八絆編年平安2期(9世紀末~10世紀)に相

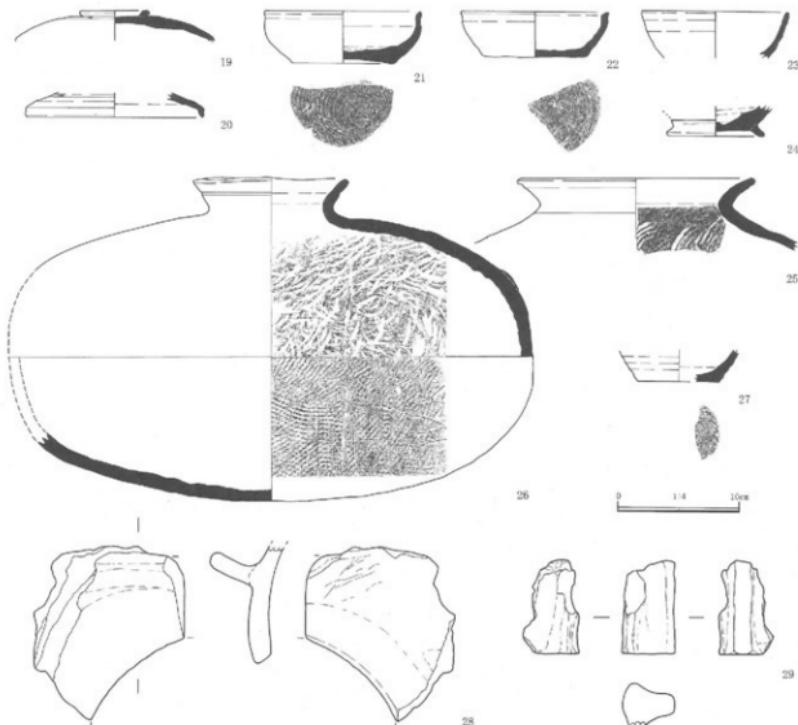


図23 遺構外出土遺物（1）

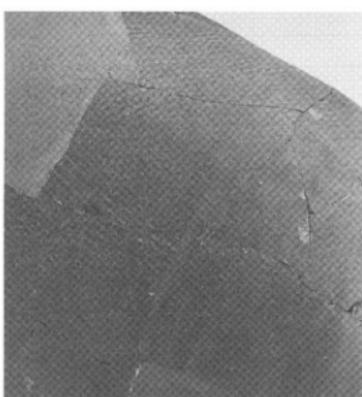


fig. 3 混合痕（26）

当しよう（註3）。C 9グリッドI層上面から出土している。28・29は甌で、28が底部部分、29は左側脚部である。近世の土塼2盛土内から出土した。概ね須恵器と同時期と考えられる。

製鉄関連遺物はそのほとんどが遺構外出土である。F 8～F 15、F 25～F 32は楕円形鍛冶滓で、後者は含鉄である。F 16～F 24は鍛冶滓。F 33は不明、F 34は絞具、F 35がクサビ、F 36は刀子と考えられる。また30は被熱粘土塊で、鍛冶炉または竈具などの可能性があろう。（中森）

- （註）1. 萩本 勝、佐古和枝 1984「須恵器について」杉谷  
愛象ほか編『陰田』米子市教育委員会  
2. 中森 祥 2002「奈良時代後期～平安時代の土器様  
相—古市宮ノ谷山遺跡出土資料を中心に—」中森  
ほか編『古市遺跡群』3 烏取県教育文化財団  
3. 八峰 興 2000「山陰における平安時代の土器・陶  
器について」『中近世土器の基礎研究』XV

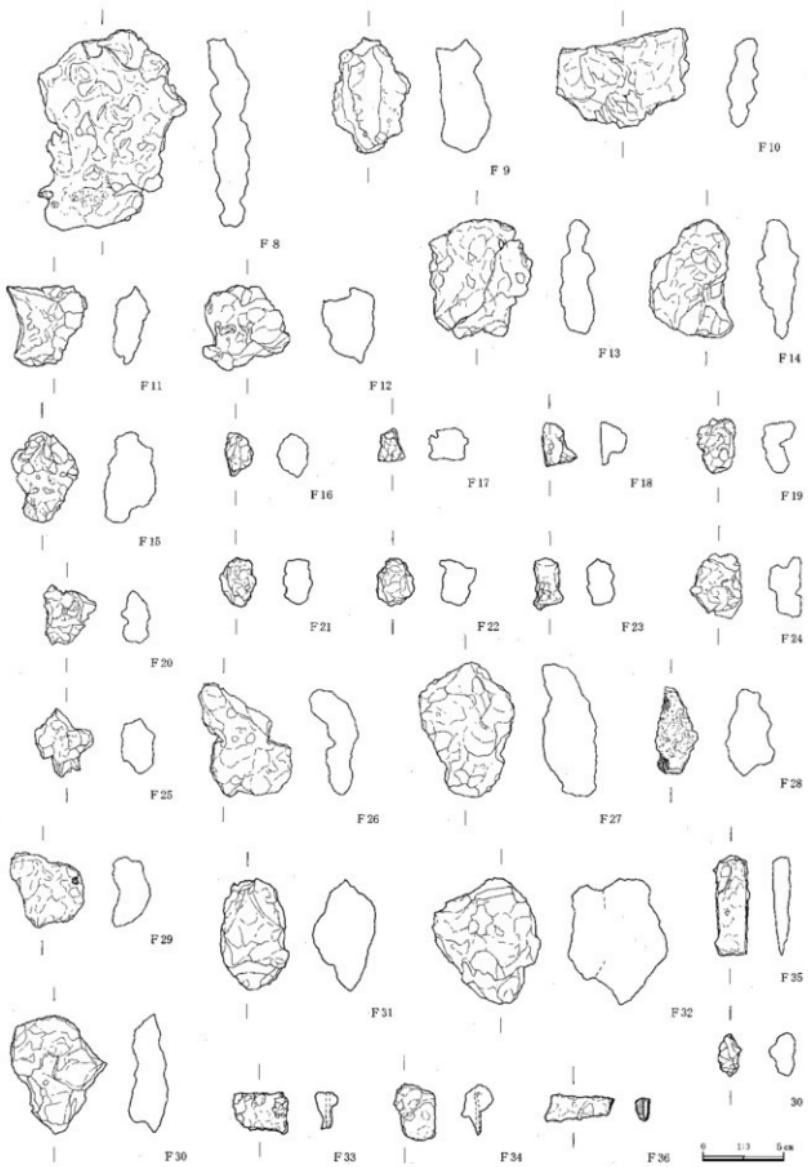


图24 遗構外出土遺物（2）

表5 遺構外出土土器観察表

遺物番号	排図	地 遺 遺 構	種別	器種	口径	器高	特 徴	胎 燒	土 成	色 調	備 考
19	23	F・G 5 I層	須恵器	蓋	—	△2.5	回転ナヂ。内面はつるつる。墨のような痕跡もあり、転用窯の可能性があるか。端部が面取りされた輪状つまみが付く。	密 良好	青灰色		
20	23	G 5・I層	須恵器	蓋	*14.8	△2.1	口縁部がL字上に屈曲する。端部はやや尖り気味。内面はつるつるしている。	密 良好	淡青灰色		
21	23	H 3・I層	須恵器	杯	*12.8	4.4	底部回転糸切り。やや底み底を呈す。体部外面下につるつる。	密 良好	淡青灰色		
22	23	H 3・I層	須恵器	杯	*12.2	3.8	底部回転糸切り。体部外面つるつる。	密 良好	淡青灰色	胎土分析資料 No.3	
23	23	H 6・I層	須恵器	杯	*12.2	△4.0	回転ナヂ。純状に器底がやや高い。	密 良好	灰色		
24	23	J 8 掘採	須恵器	高台付杯	—	△2.5	全体に磨滅。内面中央部はかなり底み。体部への立ち上がりには器壁が非常に厚い。高台は短く「八」字状に開く。	密 良好	淡灰色		
25	23	H 3・I層	須恵器	甕	*19.4	△6.0	口縁部ナヂ。体部外面は平行、内面は同心円状タキ。口縁外面に1条の沈線が巡る。外面白に無釉付着。	密 良好	青灰色		
26	23	B 8・9 I層	須恵器	横瓶	12.4	*27.0	口縁部ナヂ。体部は外面平行、内面同心円状タキ。口縁外面に細い条の沈線状のものがある。蓋台の底跡が。またこの近くに須恵器破片が付着する。	密 良好	淡灰色	両刃グリッド にも痕跡有 胎土分析資料 No.5	
27	23	C 9・I層	須恵器	杯	—	△2.7	体部回転ナヂ。底面は回転糸切り。軟質な須恵器。磨滅し不明瞭であるが、外面上に赤彩がある。	やや粗 やや軟	黄褐色	胎土分析資料 No.7	
28	23	土壙 2	土師器	甕	—	△14.4	向かって右側の底部破片。底より下側の体部は丸みをもち、先端はかなり上方を向く。内外面加工。内面はやや二次的に受熱し、わずかに赤色。	やや粗 やや軟	黄褐色	胎土分析資料 No.6	
29	23	土壙 2	土師器	甕	—	△7.8	向かって右側の底部破片。右側へ短く鶴が出る。	やや粗 やや軟	黄褐色	28と同一個体。	

表6 製鉄関連遺物分析用観察表(1)

出土状況	遺跡名		名和乙ヶ谷遺跡		遺物No.	F3			項目	津	メタル
	出土位置	HS道5・6埋土中	時期：根拠	平安時代：遺構内			分 析 研 磨	研 磨			
試料記号	検鏡：NOT-1	法 量	長径 3.3cm	色調	表：淡緑色～青黒色 裏：黒褐色	進存度 破面数	6	マクロ 硬度 CMA X線回折 化学 耐火度 カロリー 放射化 X線透過	○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○	マクロ 硬度 CMA X線回折 化学 耐火度 カロリー 放射化 X線透過	マクロ 硬度 CMA X線回折 化学 耐火度 カロリー 放射化 X線透過
			短径 4.0cm								
			厚さ 2.9cm								
	化学生：NOT-1 放射化：	—	磁着度	重量 55.0g	2	前含浸	—				
			なし		断面樹脂	—					
			なし		断面樹脂	—					
遺物種類(名称)	流動津										

## 観察所見

平面、不整五角形をした流動津の破片である。上下面と側面のごく一部は生きており、側面の大半と下面の約半分ほどが破面である。破面数は5を数える。上面は幅1cm強の流動単位が右方向に向かう走りしており、一部は重層気味である。下面にも流動単位の並走はみられ、一段と細いものが少なくとも4条ほど確認できる。上面表皮はきれいな流動状で、ごく一部が紫紅色となっている。またしわも確認できる。津は緻密で粗い気孔が点在する。左側面から手前側の破面にかけて、津の重層を示す複数方向に連なる気孔列が認められる。破面は全体に風化気味で荒れており、凹面には薄皮状の酸化土塗が固着している。結晶は上下方向の浅い筋として発達方向が判断できる。色調は表面が風化のため淡緑色で、上下面の生きている部分は青黒色である。底は黒褐色。

## 分析部分

長軸端部1/2を直線状に切断し、津部を分析に用いる。残部返却。

## 鑑 考

構成された全36点の資料のうち、本資料のみが製鍊系の流動津の可能性を持ち、他は外観的には鍛冶津が大半である。本遺跡の調査範囲は馬背骨の丘陵の頂部に当たり、地形的には製鉄遺跡があるとは考えにくい場所である。東西方向に丘陵をまたぐような道路跡が6条残されており、人やものが周辺地域から動いていた可能性は想定できるが、出土遺物の主体となる鍛冶関連遺物と、どのようにつながるのかは不明である。少なくとも分析的に製鍊津と判断されれば、周辺地域に製鍊遺跡があるという傍証資料にはなるであろう。

表7 製鉄関連遺物分析用観察表（2）

出土状況	遺跡名	名和乙ヶ谷遺跡		遺物No.	F8			項目	津	メタル
		出土位置	H3 1層上面 No.276		時期: 梗掘	平安: 包含層中				
試料記号	検鏡:	NOT-2	法	長径 8.8cm	色調	表: 茶褐色	遺存度	破片	分 析	マクロ
	化 学:	NOT-2		短径 11.9cm		地: 黒褐色	破面数	4		検鏡
	放射化:	-		厚さ 2.9cm		磁着度	2	前含浸		CMA
	遺物種類(名稱)	楕円形鐵治済		重量 285.0 g	メタル度	なし	断面樹脂	-		X線回折
										化学
										耐火度
										カロリー
										放射化
										X線通過

## 観察所見

平面、不整梢円形をした、きわめて扁平な楕円形鐵治済である。上下面には木炭痕が密集しており、上手側の肩部を中心に小破面が連続する。破面数は4を数える。上面はほぼ平坦で1~2cm大の木炭痕が全面に残されている。そのため一見、ざざ波状である。下面是浅い皿状に突出し、短軸方向に肥厚部がのびている。左上手の突出部に対応するように下面も左右方向に肥厚している。下面全体にも木炭痕が残されており、最大3cmから最小は5mm以下と、幅があるのが特色である。津は中小の気孔を内部に残しており、やや密度は低めである。下面の一部は3cm大前後の合金部の名残りが錆汚れとして残されている。色調は表面が茶褐色で、地は黒褐色である。茶褐色は酸化土砂の一種である。

## 分析部分

長軸端部1/6を直線状に切断し、津部を分析に用いる。残部返却。

## 備考

本遺跡出土の鐵関連遺物は扁平な楕円形鐵治済と3cm前後の厚みをもつ楕円形鐵治済の二者が代表的なものである。断面形は前者が皿状なのに対して、後者は楕形という違いをみせている。これが工程差なのか鍛冶炉の規模や炉底形状の違い、あるいは送風などにかかるものか、分析結果を加味して考えるべき要素として注目される。1基の鍛冶炉のみでは説明できない要素であるということは確実であろう。なお、色調が構成資料全体を含めても茶褐色のものが多いのは、資料を水洗せず、ブラシで土砂を除去した影響が加味されているかもしれない。

表8 製鉄関連遺物分析用観察表（3）

出土状況	遺跡名	名和乙ヶ谷遺跡		遺物No.	F2			項目	津	メタル
		出土位置	H7道4 No.758		時期: 梗掘	平安: 遺構内				
試料記号	検鏡:	NOT-3	法	長径 6.5cm	色調	表: 茶褐色	遺存度	破片	分 析	マクロ
	化 学:	NOT-3		短径 4.3cm		地: 黒褐色	破面数	4		検鏡
	放射化:	-		厚さ 2.2cm	磁着度	5	前含浸	-		CMA
	遺物種類(名稱)	楕円形鐵治済?		重量 81.5 g	メタル度	なし	断面樹脂	-		X線回折
										化学
										耐火度
										カロリー
										放射化
										X線通過

## 観察所見

平面、不整梢円形をした扁平な楕円形鐵治済?の破片である。上下面と右側部以外被面で、破面数は4を数える。側面の中段部にひだ状の凹部がとびびに連なっており、薄いながらも2段楕形済氣味である。上面はほぼ平坦で全体に顆粒状のゴツゴツした肌となつておらず、1cm大強のシャープな木炭痕が点在している。下面も平坦気味で5cm大前後の粉炭痕が密集するように残されており、左寄りには5cm大前後の青灰色の鍛冶炉の炉床土と推定される粘土片が点在している。右側部に残る本来の肩部から底面にかけても粉炭痕が残されている。津はかなり緻密で、気孔が上半部を中心に確認される。2段気味の津の厚みは側面からみると、下半部では右方向が徐々に厚くなり、上半部では逆に左方向に向かい厚くなっていく。色調は表面が薄い酸化土砂のため茶褐色で、地は黒褐色である。

## 分析部分

長軸端部1/3を直線状に切断し、津部を分析に用いる。残部返却。

## 備考

薄い扁平な津という点では分析資料No.2と似ているが、2段気味の津であるという点や上面の質感などが異なっている。下面には青灰色の被熱粘土片が固着していることも特色である。一見鍛冶炉ではなく製鍊炉の炉壁表面に貼り付いて形成されたような外観を示しているが、個々にみてみると楕円形鐵治済的な様相が強そうである。

表9 製鉄関連遺物分析用観察表(4)

出土状況	遺跡名	名和乙ヶ谷遺跡		遺物No.	F30			項目	津	メタル		
		出土位置	G4 I層上面 No.258		時期: 根拠	平安: 包含層						
試料記号	検鏡:	NOT-4	法量	長径 5.9cm	色調	表: 茶褐色	遺存度	破片	分析	○	○	
	化 学:	NOT-4		短径 7.3cm		地: 黒褐色	破面数	4				
	放射化:	-		厚さ 3.1cm	磁着度	5	前含浸	-				
遺物種類(名称)		楕円形鍛冶津(含鉄)	重量 140.0g		メタル度	L(●)	断面樹脂	○	X線透過		○	

## 観察所見

平面、不整五角形をした含鉄の楕円形鍛冶津の破片である。上下面是生きており、側面には小破面が連続する。大きなものを拾うと、破面数は4を数える。上面は中央部が瘤み、上半から右回りに外周部が小高くなっている。部分的にはコブ状である。側面肩部は小さな木炭痕を残すやや不規則な面で、それに加えて、下手側を中心にシャープな破面が連続している。下面は短軸方向に向かい瘤状に突出し、肥厚部も同方向である。上手側の下面右側はややこぶ状に突出しており、乱れている。表面は上面が1cm大以下の木炭痕と半流動状の津表面であるのに対し、下面は上手側が粉炭痕、下手側は鍛冶炉の炉床土と考えられる部分がわずかに残されている。また側面右手の津表面には、褐色で粘土質の鍛冶炉の炉床土と考えられる部分がわずかに残されている。含鉄部は上面右側の肩部と手前側の2ヶ所のコブ状の部分が主体で、それぞれ2.5cm大である。精錬鍛冶段階での鍛冶素材が、反応途中で固化している可能性もある。破面の気孔は下半の津部ではわずかで、上半の含鉄部では鋳物化のため不規則である。色調は表面が酸化土砂のため茶褐色で、地は黒褐色である。

## 分析部分

短軸端部1/3を直線状に切断し、津部を分析に用いる。残部返却。

## 備考

左半分の上面がやや弧状にえぐれているのは、羽口先の風の影響によるものであろうか。上面2ヶ所の2.5cm大のコブ状の突出部は、精錬鍛冶素材の性質を示す可能性もありそうである。

表10 製鉄関連遺物分析用観察表(5)

出土状況	遺跡名	名和乙ヶ谷遺跡		遺物No.	F32			項目	津	メタル	
		出土位置	E11 I層上面No.255		時期: 根拠	平安? : 包含層					
試料記号	検鏡:	NOT-5	法量	長径 6.3cm	色調	表: 茶褐色	遺存度	破片	分析	○	○
	化 学:	NOT-5		短径 7.7cm		地: 黒褐色	破面数	10			
	放射化:	-		厚さ 6.2cm	磁着度	5	前含浸	-			
遺物種類(名称)		楕円形鍛冶津(大?含鉄)	重量 340.0g		メタル度	L(●)	断面樹脂	○	X線透過		

## 観察所見

平面、不整五角形をした分厚い楕円形鍛冶津の中核部破片である。外見的に普通の津であるが、磁着が各部とも強めである。上下面の一部が生きており、側面は上手側をのぞいて不規則な破面に覆われている。破面数は都合10面を数える。上面はわずかに皿状に瘤み、木炭痕らしき凹みや小さな突出部が認められる。上手側の側面は肩部からのびる急角度の自然面で、中段部が横方向に瘤んでいる。この瘤みは右側面の破面にもかかずにつながっており、2段階形津の一端である可能性を色濃く示している。表面には1cm大前後の木炭痕が点々と認められる。左右の側面や手前側の側面部は大きな凹凸を持つ不自然な破面で、中小の不定形の気孔や、木炭痕が数多く確認できる。下面是全体的には平坦気孔で、その表面には木炭痕や津自体の凹凸が残されている。資料表面には各部とも茶褐色の色調がにじみ、左側部の一部では小さな放射割れとなっている。色調は表面が酸化土砂のため茶褐色で、地は黒褐色である。

## 分析部分

長軸端部1/3を直線状に切断し、メタル部を中心に分析に用いる。断面樹脂塗布。残部返却。

## 備考

所見で示したように、二段階形津の中核部から側部にかけての破片である可能性が高そうである。そうした視点でみると津質の似た含鉄の楕円形津が上下2層に重層していることになる。厚みはそれぞれ3cm前後で、津質や含鉄部の点在などかなり類似した作業内容を連続していることが読み取れる。その意味では含鉄ではないものの、F1、F4、F7、F9、F26、F27と3cm前後の厚さをもつ楕円形鍛冶津が一定の割合を占めており、たまたま本資料のみが津を除き忘れて作業を進めた結果かもしれない。

表11 製鉄関連遺物分析用観察表（6）

出土状況	遺跡名	名和乙ヶ谷遺跡		遺物No.	F34			分析	項目	津	メタル
		出土位置	14 1層 No.471		時期：根拠	平安：包含層					
試料記号	検鏡：NOT-6	法量	長径 2.6cm	色調	表：茶褐色	遺存度	破片	分析	マクロ	○	
	化 学：-		短径 3.5cm		地：黒褐色	破面数	1?		検鏡	○	
	放射化：-		厚さ 2.4cm	磁着度	2	前含浸	-		硬度	○	
遺物種類(名称)		重量 18.2g		メタル度	L(●)	断面樹脂	○		CMA		
遺物種類(名称)		鉄製品(鉢具)							X線回析		
									化学		
									耐火度		
									カロリー		
									放射化		
									X線透過		○

## 観察所見

幅1.8cm前後の帯状の薄板を「？」字状に折り曲げた鉢具状の鉄製品である。厚みは1mm強であったと推定されるが、酸化土砂やサビ跡のため見かけ上は厚くなってしまっている。上面の短軸方向の幅は2.6cm程度で、その下面には同様に短軸方向に向かう木質が1.5cmほどの厚さで覆している。上手側側面で逆し字状に直角に曲げた上で1.5cm程度で再度内側に弧状に巻き込んでいる。上面左側上手から上手側下面と連続してコブ状の酸化土砂が取り巻いている。木質は板状で外観的には広葉樹材ではないかと推定される。色調は表面が酸化土砂のため茶褐色で、跡跡がもつれの部分は黒褐色である。本質部は濃茶褐色となっている。

## 分析部分

短軸端部1/3を直線状に切断し、メタル部を分析に用いる。断面樹脂塗布。残部返却。

## 備考

農工具などの木部の角を削るように折り曲げられた薄板状の鉄製品である。木部の走行方向が鉄製品の柄部を支える直方向ではなく、短軸側に沿っていることも機能を示す情報として捉えられるが、現状では不明品として扱うことになる。出土層位はI層とした平安時代の包含層であるということを注目される。

表12 製鉄関連遺物分析用観察表（7）

出土状況	遺跡名	名和乙ヶ谷遺跡		遺物No.	F35			分析	項目	津	メタル
		出土位置	C8 1層上面NO.48		時期：根拠	平安？：包含層					
試料記号	検鏡：NOT-7	法量	長径 2.0cm	色調	表：濃茶褐色	遺存度	完形	分析	マクロ	○	
	化 学：-		短径 6.2cm		地：黒褐色	破面数	0		検鏡	○	
	放射化：-		厚さ 1.3cm	磁着度	5	前含浸	-		硬度	○	
遺物種類(名称)		重量 33.2g		メタル度	L(●)	断面樹脂	○		CMA	○	
									X線回析		
									化学		
									耐火度		
									カロリー		
									放射化		
									X線透過		○

## 観察所見

長さ6cmほどの小さな模状の鉄製品である。表面には小さな跡跡の欠けが散見するが、ほぼ完品とみてよさそうである。基部から刃部に向かって細冊状の平面形をもち、綫断面形は強いV字形である。頭部は平坦で厚みは9mm前後である。側部も平坦に切れしており、刃がついているほど薄くなっています。細く見ると小さな波状である。各面とも平坦で各所から小さな酸化膜のじみや放射割れが発達している。表面が剥離した部分の鋸部は層状で鍛造品であることを示している。頭部は厚みの方向ではわずかに傾斜あるいは弧状になっている状態で、使用痕の可能性があろう。色調は断面が濃茶褐色で、地は黒褐色である。

## 分析部分

短軸端部角1/6を直線状に切断し、メタル部を分析に用いる。断面樹脂塗布。残部返却。

## 備考

跡跡が弱く、外形もよく残っており、やや時期の新しい鉄製品であることももっている資料である。出土層位はI層上面で平安～江戸期までの幅広い可能性を残す資料である。結果的にやや時期が新しいものと判断されても地域の鉄生産に対応する情報を読み取れるかもしれないということで加えられた資料である。

表13 遺構外出土製鉄関連遺物観察表

遺物番号	遺物名	地区位置	特徴	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	磁着度	メタル度
F 8	楕形鐵治津(大)	H 3 I 層上	分析資料2	8.8	11.9	2.9	385.0	2	なし
F 9	楕形鐵治津(中)	H 3 I 層上	やや厚手のまよまりのよい楕形鐵治津の側部。上面は外周部がヒガ状に突出。下面は中の不規則な凹凸上体。	4.1	7.4	3.4	130.0	2	なし
F 10	楕形鐵治津(中)	H 8 I 層上	薄手の楕形鐵治津の半欠品。上下面とも小型の木炭痕が密着。気孔はやや多め。中央部が一段と高い。	8.1	5.4	2.2	131.0	3	なし
F 11	楕形鐵治津	H 3 I 層上	中厚の楕形鐵治津の中核部破片。上下面とも微細な凹凸上体。下面は大きな波状でわずかに鍛造炉跡がある。	4.3	4.9	2.2	82.5	3	なし
F 12	楕形鐵治津	I 3 I 層上	楕形鐵治津の中核部から側部よりの破片。上面は浅くくぼみ木炭痕が並ぶ。側部は鍛造が強く木炭痕があり。所面形はややV字形。気孔が多めで結晶が発達。	5.1	4.9	3.5	118.0	3	なし
F 13	楕形鐵治津	道1・ 2②層		6.5	6.9	2.0	131.0	-	なし
F 14	楕形鐵治津	集石		4.7	7.2	2.4	150.0	-	なし
F 15	楕形鐵治津(小)二段	E 8 窓地		3.9	5.6	3.2	49.4	-	なし
F 16	鐵治津	I 6 I 層上	粘土質の鐵治津の側面の破片。気孔が多く比重が低め。一部黒色ガラス質。	1.7	3.7	2.0	6.2	1	なし
F 17	鐵治津	E 6 I 層	楕形鐵治津の小破片。側面は全面がシャープな破面。気孔は少なめで密度が高い。	1.2	2.3	2.3	9.5	2	なし
F 18	鐵治津	I 6 I 層	楕形鐵治津の側部よりの破片。上面は平坦気味で右側部は木炭痕。下面はやや波動状。	1.9	2.8	1.7	11.8	2	なし
F 19	鐵治津	I 5 I 層上	鍛化部をもつ不規則な鐵治津破片。内外に小型の木炭痕が多め。下面はコブ状でヶ所が突出。	2.4	3.3	2.1	16.2	2	なし
F 20	鐵治津	I 4 I 層上	小さな凹凸の激しい鐵治津破片。上面の木炭痕の方がより明確。側部の一端が破損。	3.3	3.8	1.4	19.4	2	なし
F 21	鐵治津	G 3 I 層	楕形鐵治津の側部破片。上下面と右側が生きており微細な凹凸上体。一部は木炭痕。気孔が上下方向にのびる。	2.0	3.1	1.4	17.8	1	なし
F 22	鐵治津	H 3 I 層	やや厚い楕形鐵治津の側部破片。左側面が破損して窓内にも木炭痕あり。上下面と右側面には微細な木炭痕。	2.3	2.9	2.9	28.2	2	なし
F 23	鐵治津(含鉄)	I 4 I 層上	やや薄手の楕形鐵治津の側部よりの破片。上面の気孔ばかり。下下面と左側面が生きており木炭痕の波状。破面の気孔ばかり。	1.7	3.7	1.8	13.4	3	鍛化(△)
F 24	鐵治津(ガラス質)	I 5 I 層	黒色ガラス質の溶が部分を占める。二段楕形鐵治津の破片。上面は微細な木炭痕で側部は斜め下方に向いてびれる。下面は浅い皿状で一部に鐵治津が炉床もあり。全体にガス質。	2.8	3.8	2.3	18.8	2	なし
F 25	楕形鐵治津表抜	I 5 表抜	やや比重の高い不定形な含鉄の楕形鐵治津破片。上面や側面に木炭痕が大きめ、希を失している。突出部は赤熱時に覆われ破面の一部は焼結物。	3.7	4.1	2.5	33.8	3	鍛化(△)
F 26	楕形鐵治津(中・含鉄)	H 8 表土	ゴツゴツしたサビ色の部分と津波の混在した楕形鐵治津の半欠品。上面は緩やかに窓面と左側面によりサビ色が強い。右側部は一貫気味。下面は半流動状。	4.8	5.9	3.3	120.0	4	鍛化(△)
F 27	楕形鐵治津(中・含鉄)	H 6 表土	しつかりした楕形鐵治津の半欠品。左側部が破面で上面は中央部が小高い。外周部は木炭痕。側部から底面は緩やかな楕形。気孔は粗い。	4.2	8.2	3.6	200.0	5	鍛化(△)
F 28	楕形鐵治津(小・含鉄)	道1・ 2②層	製鍊鐵治津、鍛造片付着か。	2.6	5.3	2.7	42.6	-	L(●)
F 29	楕形鐵治津(小・含鉄)	H 5 I 層		4.4	4.4	1.9	56.0	-	L(●)
F 30	楕形鐵治津(中・含鉄)	G 4 I 层上	分析資料4	5.0	7.3	3.1	140.0	5	L(●)
F 31	楕形鐵治津(大?・含鉄)	E 8 窓地		4.0	6.8	3.8	159.0	L(●)	
F 32	楕形鐵治津(大?・含鉄)	E 11 I 層上	分析資料5	6.3	7.7	6.2	340.0	5	L(●)
F 33	鐵製品(帯状不明)	H 3 I 層	幅2.0cm前後の帯状の鐵製品。一見鉄錠の破片のようにも見えるが短軸側に刃部がなく折り返し部も確認できない。右側部は平坦に彫刻が複数ある。本來の厚みは3mm弱。長軸方向に向かい弧状に反り返っている。破面は左側部。	3.4	2.6	1.5	10.8	3	H(○)
F 34	鐵製品(鉄具)	I 4 I 層上	分析資料6	2.6	3.5	2.4	18.2	2	L(●)
F 35	紙製品(クサビ)	C 8 I 層上	分析資料7	2.0	6.2	1.3	33.2	5	L(●)
F 36	鐵製品(刀子)	F 8 窓地	刀子の刃部の基部の破片である。下面には刃の一部と推定される木炭痕が沿うように残っている。位置は不明ながら導入導出板が折り曲げた絞め具が2件ついている。刀子は研磨減りしており身幅が1cmと細くなっている。小片が剥離しているが同一個体の遺物群である。	3.9	1.8	0.4	6.0	-	
30	被燃粘土塊	I 9 I 層上	被燃した小さな粘土塊。わずかにスガが混ざれていて、上面は淡赤褐色で酸化。下半部は薄く灰吸盤。鐵治津またはカタボ材などの可能性あり。	1.4	2.6	1.7	3.3	1	なし

# 第6章 近世以降の調査

## 第1節 概要 (図25)

表土直下、平安時代の包含層であるI層上面で当該期の遺構、遺物を検出した。遺構は調査地ほぼ中央に位置する大きな窪地を中心に分布しており、ここから北方向へほぼ直線的に伸びる溝4や、窪地の南にあり、東西方向に走る道7などがある。また調査地南には炭焼き窯と考えられる土坑12があり、この北に位置する平安時代の道1・2埋土上層にも炭化物の拭がりが認められた。

遺物は非常に少なく、肥前系の陶磁器や土師質土器などのほか、寛永通寶がこれら遺構に関連して出土している。そのことから概ね近世後期を主体とすると考えられよう。  
(中森)

## 第2節 検出した遺構と遺物

### 窪地、テラス1~4 (図26~28、図版8・9)

窪地は調査地のほぼ中央部に位置し、調査地を南北に二分する道から北へ向けて拡がる。最大幅が約18.6m、奥行き21m、高さは北壁で2mほどを測る。

この壁面を観察した結果、I層上から掘り込まれていることが判明した。底面上には平均で0.3mほど、最大約0.6mの厚さで土が堆積しており、それは0.05~0.15mの厚さのものが互層状になる。また底面は火砕流堆積のvi層ないし、その上にのるv層（黄色砂質土）である。底面は平らではなく、非常に凹凸が激しい。その形状も梢円形などの土坑状を呈したり、蛇行する溝状であったり不定である。ピットなども検出できなかったことか

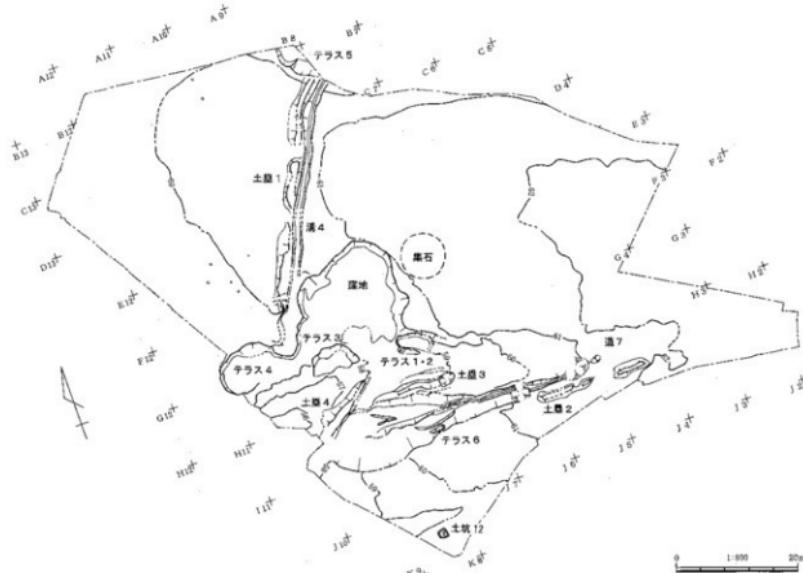


図25 近世遺構分布



図26 窪地、テラス1～4



図27 窟地内土層断面

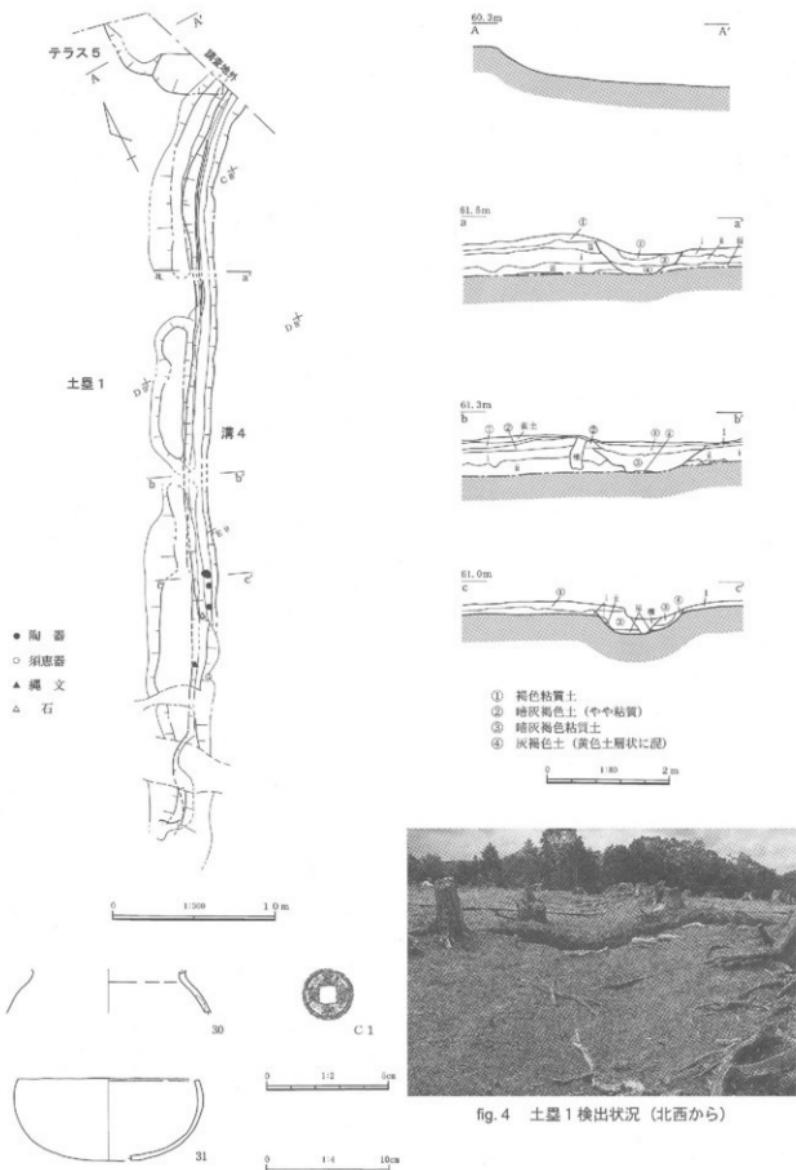


fig. 4 土壠 1 検出状況（北西から）

図28 溝4、土壠1、テラス5および窪地内出土遺物

ら、建物などを建てようとしたスペースではなく、土を採取する場所であったと考えられる。

テラス1～4は庭地の南側に位置するもので、調査段階では独立したテラスとして調査を行った。しかし庭地との関係を考えたとき、同様に土採取の際に掘削されたものと判断した。

遺物は庭地内から寛永通寶（C1）のほか、古墳時代の土師器甕（30）、および壺（31）が出土した。古墳時代の土師器は、テラス2の北側の塗みからまとまっていた。また鉄滓（F15・31）、木質を残す刀子片（F36）も出土している。

（中森）

#### 溝4、土塁1 （図28、図版II-1～3）

溝4は庭地から北へほぼ直線的に伸び、北端部が東へ屈曲する。その屈曲部西には後述するテラス5がある。幅は1.5mで、断面が逆台形を呈する。溝北部の西側壁は二段状に掘り込まれる。深さは0.5m、底面は南から北へ向けて低くなる。底面は硬化していなかったため溝とした。

溝4に並行し、これを覆うように土塁1は盛土されている。盛土は2.5～4.0mの幅で、約0.2mと低い。

遺物は図化できなかったが須恵器片などのほか、備前陶器甕が溝4内から出土している。

#### テラス5 （図28）

調査地北側、溝4の北側先端が東に折れる部分の北西に位置する。南西側は緩やかに斜面をカットし、西側で2段になる。底面にピットではなく、部分的に硬化面がみられた。このテラスから調査地外西に狭い平坦地が続いており、テラス上に一部硬化した面をもっていたことなどから、山道であったと考えられる。

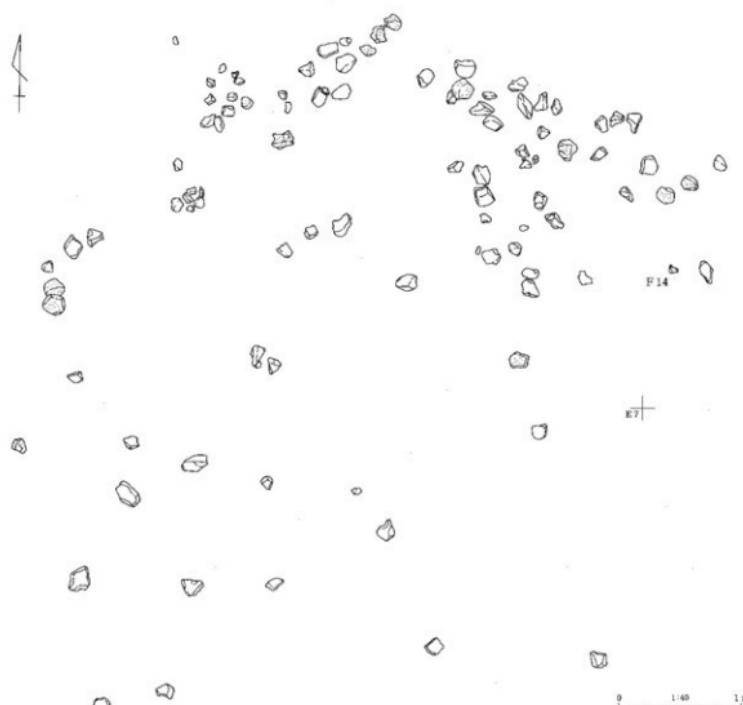


図29 集石

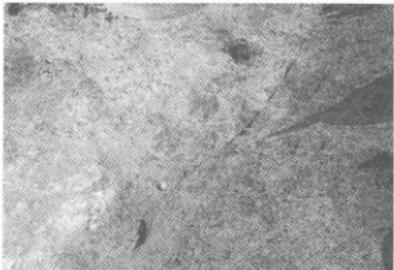
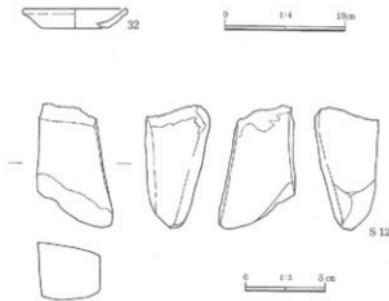
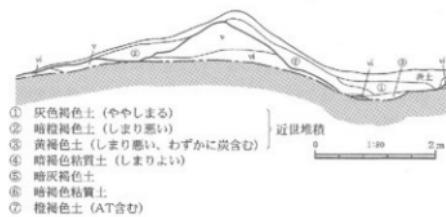
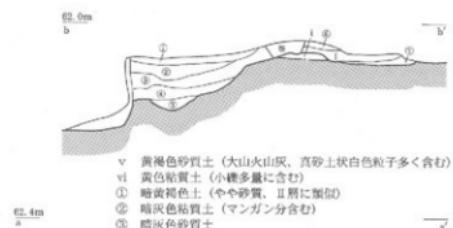
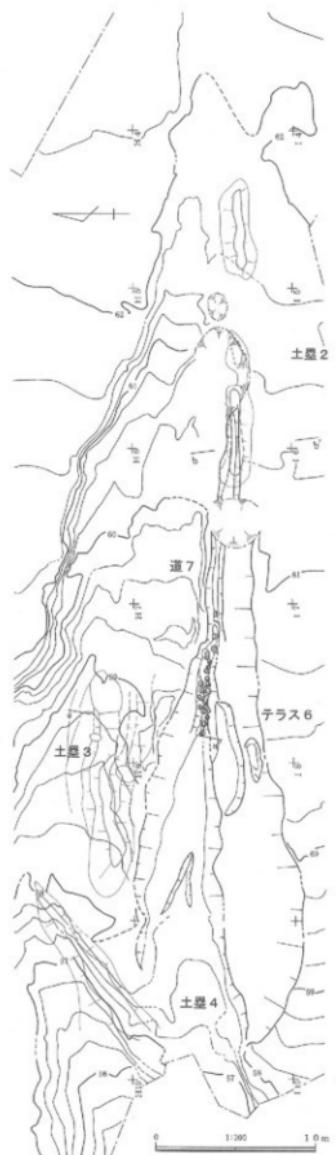


fig. 5 波板状凹凸面断面（南東から）

図30 道7、土壘2～4、テラス6および出土遺物

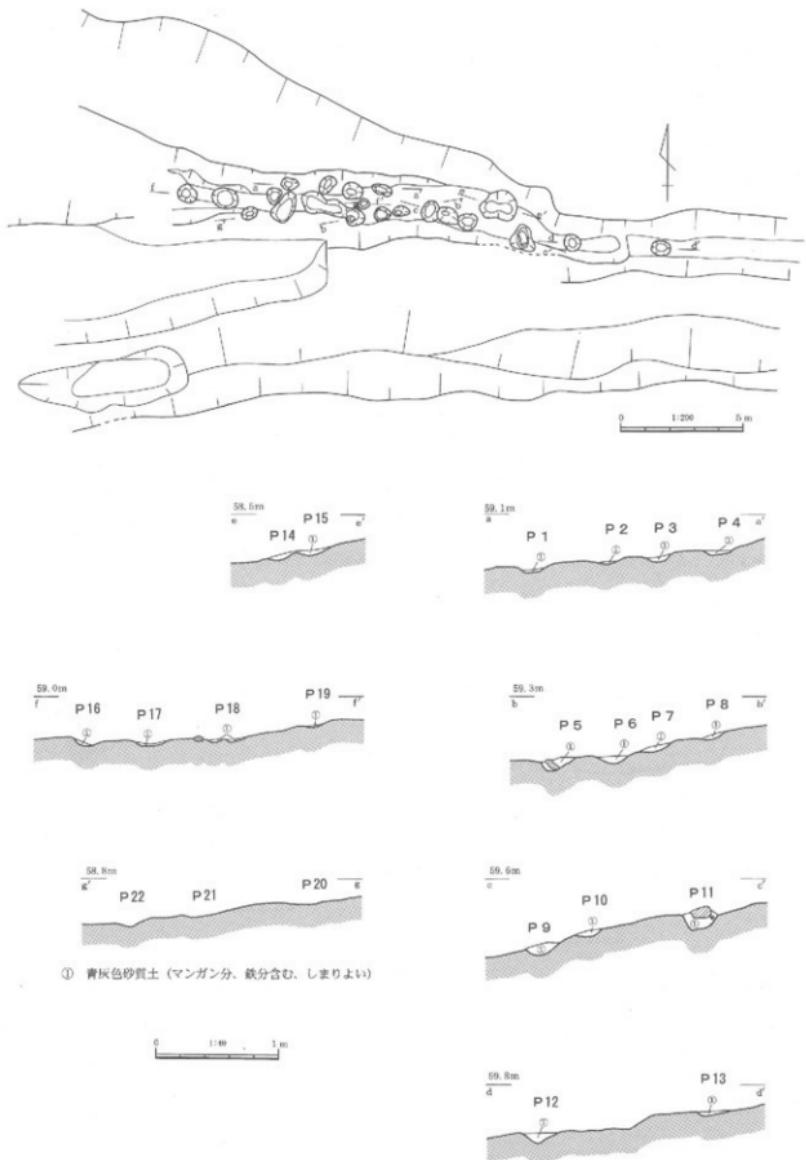


図31 道7

遺物は須恵器などがわずかに出土しているが、溝4埋土と類似することからこの時期と判断した。溝4と同時期で、一連のものと思われる。

(中森)

#### 集石 (図29、図版12-3)

窪地より東の平坦地にある。表土剥ぎ前の段階で、表土上に礫がいくつか散布していた。本調査地から西方、尾根先端部へ110mほど行くと、名和氏一族郎党の墓といわれる石積み基壇上に整然と並べられた五輪塔・宝篋印塔群がある。そうしたことからそれらに関連する墓所の可能性も考えられたため、この範囲は表土剥ぎを人力で行なった。その結果I層上面において、 $6 \times 6$ mほどの範囲に比較的まばらな状態で拳から人頭大の礫を検出した。とくに密に、かつ積み上げたようなものも見られず、五輪塔などの破片と考えられるものもなかった。またこれら集石下から土坑などの遺構は見つからなかった。そのため性格については不明であるが、礫は地山v層に類似するもので占められていたことから、道路の掘削に伴って出た礫をこの場所に廃棄したことなどが考えられよう。

集石の範囲からは古代の須恵器、および腕形鍛冶津 (F14) が出土しているのみである。検出面から近世後期以降と考えられる。

(中森)

#### 道7、テラス6、土星2~4 (図30・31、図版10・11-3)

道7は道5・6を切り、H5グリッドから始まる。検出した幅は東側で0.7~1.3m、15m西に行ったところからは幅が拡がる。その辺りはちょうど岩盤 (v層) とv層との境界に当たり、v層上にピット群を検出した。これらは道5・6などのように列をほとんど成さず、不規則な状態であった。ピット内埋土は砂質土が主体で、しまるものも多い。

なお道6 (平安時代) と道7は擾乱部分をはさみ直線的につながる位置関係にある。またその幅も道7東側では類似する。しかし埋土が異なっていたことから、これらは別造構と判断した。

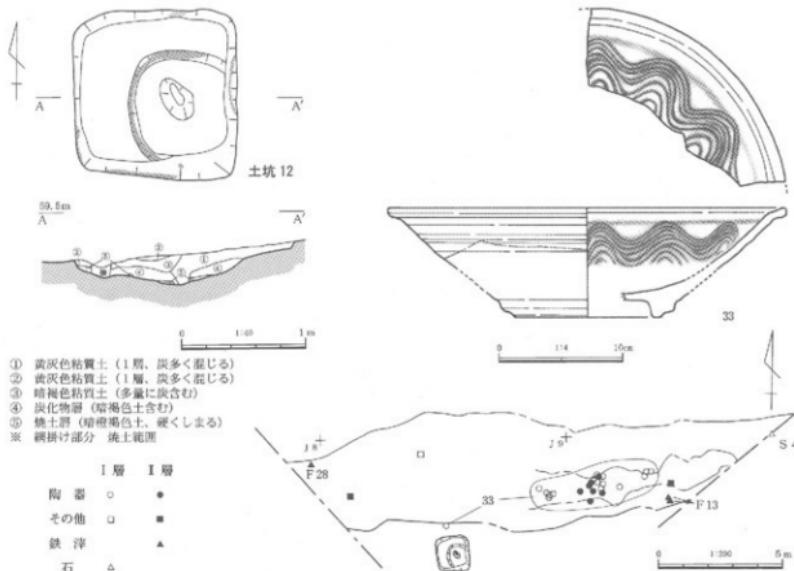


図32 土坑12および出土遺物

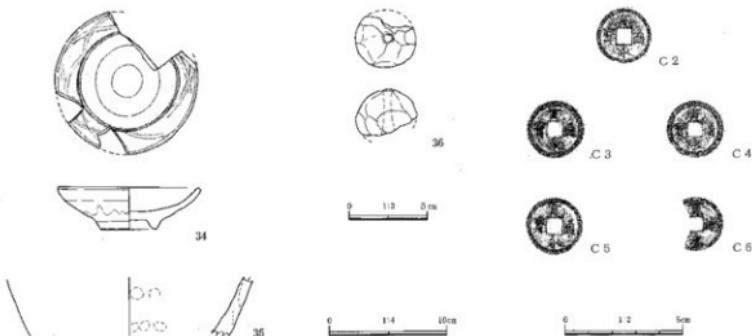


図33 遺構外出土遺物

道7の幅が拡がる部分の南側斜面にテラス6は位置する。幅7m、奥行きは2mほどを測り、底面にピットなどの施設は確認できなかった。

土壘2は道5・7南側の肩上に位置し、これらを覆って盛土される。I5杭周辺で途切れ、その東が6m、西へは10mほどの長さを測る。幅は1.5~2.1mほど、高さは0.1m前後であった。

土壘3・4は道7と現代の山道との間にあり、後者が掘削された際削りだされたものである。

これらから出土したものは図示できるものがほとんどなかったが、道7からは肥前系磁器片などが出土している。これら遺構の埋土が同一であることから、近世のものと判断した。

土壘2盛土中から土師器龜片(図23、28・29)、土師器皿(32)、砥石(S12)が出土した。32は小皿で口縁端部がやや肥厚する。12~13世紀のものであろうか。  
(中森)

土坑12 (図32、図版11-5・6)

J8グリッド、道1・2の南にはほぼ接して位置する。径約1.3mの方形を呈し、中央南東側は2段に掘り込まれる。その底面には長径0.3m、短径0.2mほどの横円形状の浅い窪みがある。土坑の深さは0.2mと浅い。

土坑と2段目の上場が帶状に、底面が部分的ではあるが面的に赤色硬化しており、また底面上に0.1cmほどの厚さで炭化物層が堆積していたことから、炭焼窯であったと考えられる。さらに土坑埋土①層が北接する道1・2上層にも扒がっており、当時窯んでいたこの部分に排土したことが想定できよう。

遺物は肥前系陶器鉢(33)が①層中から出土し、道上層に分布するものと接合した。大橋編年のIV期(1690年代~1780年代)に相当する(註1)。このほか道上層から鉄滓(F13・28)が出土した。  
(中森)

遺構外出土遺物 (図33、図版9-1・12-1・2)

34は肥前系磁器皿である。35は須恵器のもので、甕であろうか。底部近くの破片で、内面に指頭圧痕がみられる。時期は不明だが中世のものと考えられる。H3グリッドI層上で出土している。36は土玉である。下半部が欠損しているが、下側の孔のほうが幅広くなるものと思われる。D10グリッドI層上で出土しており、時期は不明である。

C2~C5はいずれも新寛永通寶である。I層上面から出土。

(中森)

(註1) 九州近代陶磁学会編 2000『九州陶磁の編年』

表14 第6章土器・陶磁器觀察表

遺物番号	挿図	地区・遺構	種別	器種	口径	器高	特徴	胎土焼成	色調	備考
30	28	F・G 5 I層	土師器	甕	—	△3.5	外面ナデ、内面ケズリ。	やや粗やや軟	橙褐色	
31	28	G 5 I層	土師器	坏	*15.0	△6.7	口縁部端部面取り。器壁非常に薄い。全体的に薄い。	やや粗やや軟	橙褐色	
32	30	H 3 I層	土師器	皿	*8.6	1.6	体部ナデ。底部回転糸切り。口縁端部やや肥厚。	やや粗やや軟	橙褐色	
33	32	土坑12	陶器	鉢	*32.0	*9.0	内面刷毛目装飾。見込みには砂付着。	密良好	褐色	肥前系
34	33	H 6 I層	磁器	皿	11.9	3.7	内面二重斜格子文。見込みは蛇ノ目輪測ぎ。	密良好	白色	肥前系
35	33	J 8 表採	瓦質	甕	—	△5.0	内外面ナデ。内面はユビオサエ。	密良好	灰色	

表15 第6章土・石・銅製品觀察表

遺物番号	挿図	地区・遺構	種別	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	備考
36	33	C 10・I層上	土玉	△2.9	3.9	—	*23.2	
S 12	30	土塁2	砾石	△7.7	4.7	4.0	*179.0	石英斑岩
C 1	28	F 9・窪地	銭貨	*	2.1	0.1	1.6	新寛永通寶
C 2	33	C 11・I層上	銭貨		2.3	0.1	2.2	新寛永通寶
C 3	33	道1・2、①層	銭貨		2.4	0.1	2.6	新寛永通寶
C 4	33	B 9・I層	銭貨		2.4	0.1	2.4	新寛永通寶
C 5	33	C 10・I層	銭貨		2.4	0.1	2.0	新寛永通寶
C 6	33	G 4・I層	銭貨		2.3	0.1	*1.4	新寛永通寶